

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

*特集 役に立つ学問？

内田 樹 1

役に立つ学問とは何か。

有田正規 8

あそびとしての基礎研究

明星聖子 14

嘘の探究

塚原東吾 20

デュアル・ユースのトリック

——そこに織り込み済みになっているのは、軍事研究の推進だけなのだろうか？

*連載

中垣信夫 26

命の形——形の名No.11

大学出版部ニュース 29

No.110
2017.4
春



一般社団法人
大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

Japan
Univ
Pres
No.
2017
Spr

大学出版部協会 新刊ご案内

ブックレット第4弾

対立を乗り越える 心の実践

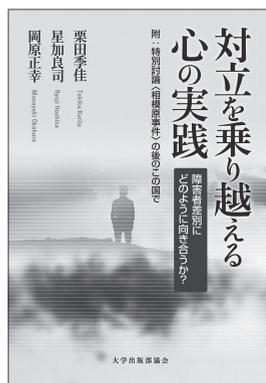
障害者差別にどのように向き合うか？

栗田季佳・星加良司・岡原正幸

大勢の障害者の命が奪われた〈相模原事件〉を起す影は、私たちの内にある。制度や「ねばならない」的教導では、差別はなくなる。「潜在化する偏見」を炙りだし、その原因となる心のメカニズムと社会的背景にまで遡って考察することで、差別解消への糸口を考える。

[発行：大学出版部協会／発売：東京大学出版会]

ISBN978-4-13-003153-0 2017年2月刊行
A5判／88頁／本体1,000円＋税



主要 目次

- 第1章 見えない偏見
障害者を取り巻く問題に現れる心の動き (栗田季佳)
- 第2章 バリアフリーという挑戦
「社会を変える」ことは可能か (星加良司)
- 第3章 生の問題として〈対立を乗り越える〉を考える (岡原正幸)
- 第4章 討論
対立を乗り越える学問の挑戦 (栗田季佳・星加良司・岡原正幸)
- 第5章 特別討論〈相模原事件〉の後のこの国で
有事モード下の差別と偏見

特集*役に立つ学問?

役に立つ学問とは何か。

内田樹 (神戸女学院大学名誉教授)

「役に立つ学問」とは何のことなのだろう。そもそも学問は役に立つとか立たないとかいう言葉づかいで語れるものなのか。正直に申し上げて、私はこういう問いにまともに取り合う気になれない。というのは、こういう設問形式で問う人は、一般解を求めているようなふりをしているけれど、実際には「その学問は私の自己利益の増大に役に立つのか?」を問うているからである。だから、にべもない答えを許してもらえぬなら、私の答えは「そんなの知るかよ」である。何を学ぶかは自分で判断して、判断の正否についての全責任は自分で取るしかない。「役に立つ」ということには原理的に一般性がないからである。

すべての学問やテクノロジーの有用性は地域限定的・期間限定的である。ある空間的閉域を離れば、あるいはある歴史的環境を離れたら、それはもう有用ではなくなる。空間の広狭、期間の長短に多少の差はあるけれど、結局は

「程度問題」である。それどころか、ある人にとつての「有用」はしばしば別の人にとつての「無用」や「有害」でさえある。例えば、兵器産業は有用か。この問いに即答できる人がどれだけいるだろうか。兵器を開発し、市場に投じ、それによって大きな収益を上げた企業や、その会社の株を買って儲けた投資家や、その企業から法人税を徴収して国庫に収めた国家や、その企業で雇用された従業員にとつて兵器産業はたしかに有用であるだろう。けれども、そうやって兵器の機能が向上し、手際のない営業活動によって、廉価で高性能の兵器が世界中に広くゆきわたったせいで「殺されやすくなった」人たちが他方にはいる。家を焼かれ、家族を殺された人に向かって「兵器産業は有用でしようか」と訊いても肯定的な答えは得られないだろう。

原子力発電事業は有用か。これも難問だ。この先日本列島でまったく地震も津波もテロもなく、早い段階で放射性

廃棄物の完全な処理技術が確立し、かつ電力需要がこのまま高い水準で推移するという条件がすべて満たされた場合、原子力発電事業は有用であるだろう。けれども、そのどれか一つの条件でも満たされない場合、この事業は「無用」から「非常に有害」の間のどこかに位置づけられることになる。現段階では予測できない条件によつて有用物がいきなり有害物に転化するようなものについて現段階でその「有用性」や「価値」を論じることにはたぶん意味がない。もっと穏当な喩えでもよい。英語教育は有用か。簡単そうだが、これも即答することはむずかしい。外国語教育の有用性もまた歴史的条件の関数だからである。

現在、英語教育が有用であるのは過去二世紀以上にわたつて英米という英語話者の国が世界の覇権国家だったからである。それ以外の理由はない。現代の世界で生き延びる上で重要かつ有用なテキストの多くが英語で書かれているのは事実だが、それは英語圏に例外的に優秀な人々が生まれたからではなく、英語が覇権国家の言語だからである。アメリカはこれからもしばらくは軍事的にも経済的にも大国であり続けるだろう。だが、「パクス・アメリカナ」の時代もいずれ終わる。その後どの国が指導的な地位を占めることになるのかは誰にも予想がつかない。ロシアかも知れない。中国かも知れない。ドイツかも知れない。その場合、私たちはどれかの強国の国語を新たな「リンガフランカ」として学ぶことをたぶん強いられる。

私が学生だった頃、理系の学生たちの多くが第二外国語にロシア語を履修していた。それは一九六〇年代まで、自然科学のいくつかの分野ではソ連が欧米に拮抗ないし凌駕していたからである。しばらくして、ソ連の学術的没落とともにロシア語履修者は地を払った。そういうときの学生たちの見限り方の非情ぶりに私は少し感動した。同じことが英語について起こるかも知れないと私は思っている。いざれロシア語や中国語やドイツ語やアラビア語に熟達している人たちがその「希少価値」ゆえに英語話者より重用されるという日が来るかも知れない。その可能性は高い。現にもうすでに、一部の若者たちの間ではアラビア語やトルコ語学習が静かなブームになっている。彼らは独自の嗅覚で手持ち資源を効果的に投ずべき先を探りしているのである。そして、彼らの予測が外れたとしても、彼らは失つた時間と手間の返還を誰に対しても求めることはできない。そもそも私たち日本人こそ「リンガフランカ」の脆さを骨身にしみて経験しているはずである。漢文の読み書きができることは古代から日本人の知識人にとつて大陸渡来の新しい学問を学ぶための必須の知的ツールであった。それは遣隋使小野妹子の時代から、朝鮮通信使を対馬に迎えた雨森芳州の時代まで変わらない。漢文は日本ばかりか、東アジア全域において基礎的なコミュニケーション・ツールであった。だから、どこの国を旅しても、知識人同士は、懐から矢立と懐紙を取り出して、さらさらと文を認めれば

互いに意を通じることができたのである。漢文運用能力はとりわけ近代以降にその威力を發揮した。中江兆民はルソンの『民約論』を日本語訳すると同時に漢訳もした。だから、多くの中国人知識人は兆民を介してフランスの啓蒙思想に触れることができた。樽井藤吉は日本と朝鮮の対等合併を説いた『大東合邦論』を漢語で書いたが、それは彼が日本・朝鮮二国のみならず広く東アジア全域の読者を想定していたからである。宮崎滔天も北一輝も内田良平もかの「アジア主義者」たちは、中国・朝鮮の政治闘争に直接コミットしていったが、おそらく彼らの多くはオーラル・コミュニケーションではなく「筆談」によってそれぞれの国での組織や運動にかかわったはずである。こういう姿勢のことをこそ私は「グローバル」と呼びたいと思う。

近代まで漢文は東アジア地域限定・知識人限定の「リンガフランカ」であった。それを最初に棄てたのは日本人である。こつこつ国際共通語を学ぶよりも、占領地人民に日本語を勉強させるほうがコミュニケーション上効率的だと考えた「知恵者」が出てきたせいである。自国語の使用を占領地住民に強要するのは世界中どの国でもしていることだから日本だけを責めることはできないが、いづれにせよ自国語を他者に押し付けることの利便性を優先させたことよって、それまで東アジア全域のコミュニケーション・ツールであった漢文はその地位を失った。日本人は自分の手で、有史以来変わることなく「有用」であった学問

を自らの手で「無用」なものに変えてしまったのである。

戦後日本の学校教育も戦前と同じく「コミュニケーション・ツールとしての漢文リテラシーの涵養」に何の関心も示さなかった。さらに韓国が（日本の占領期に日本語を強要されたことへの反発もあって）漢字使用を廃してハングルに一元化し、さらに中国が簡体字を導入するに及んで、漢文はその国際共通性を失ってしまった。千年以上にわたって「有用」とされた学問がいくつかの歴史的条件（そのうちいくつかはイデオロギー的な）によって、短期間のうちにその有用性を失った好個の適例として私は「漢文の無用化」を挙げたいと思う。

私が言いたいのは、ある学問が有用であるかどうかを決するのは、学問そのものの内在的価値ではなく、またその経験的に確証された有用性でもなく、多くの場合、パワーゲームにおいて、その時点で力を持っているプレイヤーの利害だということである。それ以外の要素はおしなべて副次的なものに過ぎない。

もうこれで結論は出ているので、これ以上書くことは特にない。でも紙数が大幅に残ったので、あとは余計なことを書く。

現代は世界どこでも英会話能力が「役に立つ学問」の最たるものとされているが、これを果たして「実学」と呼んでいいのかということ論じてみたい。先に述べた通り、

英語がリングフランカであるのは、いくつかの歴史的条件によつてそうなっているだけのことであつて、いずれそうではなくなる。それがいつかはわからないけれど、いずれ英語はローカルな一言語になる。

そもそも、現在日本で暮している人たちの多くにとつて英会話能力はとくに緊急性の高いものではない。ふつうの生活者に英語で話す機会はほとんどない。ときどき、「外国人に道を聞かれたときに、教えられるように」というようなことを言う人がいるが、「外国人に道を聞かれる」というようなことがどの程度の頻度で起きるのか。思い返しても、私が外国人に道を聞かれたことは過去に一度しかない。十年ほど前、芦屋駅の近くで「駅はどこか」と聞かれた。おまけにそれはフランス語であつた。私は「その角を右に曲がる」と初級フランス語の三頁目くらいに出てくる文型を以て答えたが、「アシヤ」が聴き取れば、無言で手を引つ張つてゆけば済んだ話である。

異郷で困惑している人に手を差し出すというのはたいせつなことである。でも、そのためにまず必要なのは「人として」の惻隱の情であつて、外国語運用能力ではない。けれども、まことに不思議なことだが、本邦では「困っている人に手を差し伸べること」の重要性を学校で厳しく教えるというのではない。人としてのまっとうな態度を社会的格付けに適用するということもない。圧倒的な重要性が付与されているのは英会話能力に対してなのである。

はつきりと英会話能力が求められているのは経済活動の領域においてである。インバウンドの観光客を接待するホテルやレストランや店舗において、あるいは海外市場でセールスを行うビジネスマンや、海外の生産拠点で経営や業務管理を担当する人たちにとつて英語は必須のツールであろう。その必要性を私は十分に理解している。けれども、どれほどの能力を持った人間がどれほどの人数必要なのか、その数値目標にどれほどの積算根拠があるのか、私は説得力のある話を聞いたことがない。

文科省が二〇一三年に発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」は小学校三年からの英語教育開始を指示したことで話題になつたが、この計画によると中学では英語の授業は英語で行うことを基本とする。高校では「幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者となる程度流暢にやりとりができる能力を養う。授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化（発表、討論、交渉等）」することがめざされ、達成目標として「高校卒業段階で英検二級〜準一級、TOEFL五七点程度以上等」が掲げられている。日本中の高校生に高校卒業時点で「英検二級から準一級」というのは正直に言つてありえない数値目標だと思ふ。それがどの程度の英語学力を要するものかを知りたい人はネットで検索すれば過去問がすぐに読めるので、自分で解答を試みられたい。ご覧頂ければわかるが、日常的に英語を浴びるように読み、聴く、理解できな

い点についてはこまめに辞書を引き、疑問点は先生に質問し……という生活をしていないと、ふつうの高校生がこのレベルには達することはできない。他の教科の場合、そのような真摯な学習態度で高校の授業に臨んでいる生徒はほとんどいないという現実を知った上で、英語についてだけこのような要求をすることを「異常」だと思わないとしたら、その人の方がよほど「異常」である。

「計画」には高校卒業時点での達成として「幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者となる程度流暢にやりとりができる能力を養う」とあるが、そもそも日本語によってさえ「幅広い話題について抽象的な内容を理解できる」高校生がどれだけいるのか。二〇一六年の調査によれば、一〇代の新聞閲読率（閲読とは「一日一五分以上、チラシや電子版を含めて新聞を読むことをいう」）は四％である。わずか四％である。マスメディアに対する不信感が募っている時代にあつて、この数字はこの先さらに減少することはあつても、V字回復するとは思われない。たしかに高校生たちは終日スマホに見入っているが、それは別に電子版のニュースで国際情勢や国会審議を注視しているわけではないし、ツイッターやラインで政治的意見を交換したり、日本経済のゆくえについての懸念を語り合っているわけでもない。日本語でさえ「幅広い話題について抽象的な内容を理解」することに困難を覚えている人たちが外国語でそれができるはずがない。そんなことは誰でもわ

かる。ではなぜ、日本語での読解能力・対話能力の低下が深刻な問題となつている状況下で、英語で「幅広い話題について抽象的な内容を理解」するというような目標を掲げることによって優先性があり、かつその目標が達成可能だと信じられるのか。そういう計画を立てることのできる人々の頭の中身が私にはどうしても理解できない。

私に分かるのは、この計画の起案者たちが高校卒業までに子どもたちが使える教育資源の多くを英会話に投じることの必要性について自分の頭を使って考えたことがないということである。すでに現場から悲鳴が上がっているように、小学校への英語教育の導入・必修化によつては教員の業務が量的にも質的にも増大する。「バーンアウト」寸前の教育現場にさらなる負荷を課し、教員たちも児童たちも疲れ切った状態に追い込んでまでなぜ英語教育を重視するのか。なぜ達成できるはずのない到達目標を掲げてみせるのか。この「実学」への過剰な教育資源の分配の合理的理由を語ってくれる人に私はまだ会つたことがない。

英語運用能力については、その有用性について誰一人異論を口にしない。けれども、その期待される有用性とその学習努力のために投じられる手間暇を「ベネフィット」と「コスト」で計算した場合、帳尻は合うのか。「実学」を論じる人たちの経済合理性に対するこの無関心に私は驚愕するのである。

そもそも実学というのは平たく言えば、「教育投資が短

期的かつ確実に回収されるような知識や技術」のことではなかったのか。学習努力という「コスト」がただちに就職率や年収やポストといった「ベネフィット」として回収されるものを私たちの社会では「実学」と呼んでいるはずである。数学や天文学や古生物学や地質学は間違いなくかなり広い範囲で、また長期にわたって有用な学問でありうると思いが、これを誰も「実学」とは呼ばない。「金にならない」と思われているからである。学の虚実を格付けしているのは、コンテンツの良否ではなく、「教育投資の短期的かつ確実な回収が可能かどうか」だけである。そして、それは市場における当該知識・技能についての「需給関係」で決まり、学知そのものの価値とは関係がない。

以前私より二十歳ほど年長のビジネスマンと会食したときに、彼が大学在学中最も人気のあった理系学科は何だか知っているかと聞かれた。わからないと答えると「冶金学科」だと教えてもらった。製鉄業が日本経済を牽引していた時代だったのである。今の学生たちは「冶金」という文字さえもう読めないだろうが、冶金についての知識に市場が最高値をつけたのは今からわずか六〇年ほど前の話なのである。製鉄や造船や建設が日本経済の花形業界であった時代がしばらく続き、それから流通やサービス業が人気業種になり、金融や広告やマスコミに若者が集まるようになり、それからITと創薬と貧困ビジネスと高齢者ビジネスの時代になった。それぞれ人気のある業界で「即戦力」と

して使用できる知識や技能が「実学」と呼ばれたけれど、その栄枯盛衰はめぐるしかつた。だから、私たちもあと十年後には何が実学になるのか予測することができない。AppleやGoogleが十年後に存在しているかどうかさえ誰にもわからない時代なのだから、十年後の「実学」が予測できるはずがない。

もう少し身近な話をしよう。私が大学に在職していた頃、「女子大に薬学部を作る」ということがトレンドになったことがあった。ご記憶の方も多いただろうが、コンサルタントがあちこちの大学に学部創設のプロジェクトを持ちかけた。そのときに強調されたのは、薬学部なら六年通うから授業料収入が一・五倍になるという「金目の話」と、女子の「実学志向」と言われるものだった。「当今の女子学生の母親たちは娘が手に職をつけることを強く望んでいる。母親たちは娘たちに経済的自立という自分が果たせなかった夢を託す傾向にある。だから、娘たちには医学部・歯学部・薬学部を狙わせるのだ」という説明にはなかなか説得力があった。そして、その三つの中では薬学部が立ち上げコストが一番安かったので、いくつかの大学がその計画に乗った。

その結果、短期間にそれまで四六校で安定していた薬学部が七四校に急増し、薬科大学・薬学部の総定員は一万三〇〇〇人に達した。不幸なことに、これは市場の「ニーズ」

に対して供給過剰であった。結果的に多くの学部が定員割れになった。その一方、出口に当たるとる薬剤師国家試験の合格率は低いままだった。五〇%を切った年もあるが(二〇一〇年)、ここしばらくは六〇〜七〇%台で推移している。つまり、薬学部に入ったが卒業できなかった学生、卒業したが国試に通らなかつた少なからぬ数の学生が存在するということである。そして、彼ら彼女らにとって、この学問は「教育投資が短期的かつ確実に回収」できなかつた以上「実学」ではなかつた。誰が考えても薬学は有用な学問である。けれども、言葉の精密な定義に従えば「実学」ではない。一般論としては「役に立つ学問」であるけれど、それを学んだけれど国試に通らなかつた学生にとっては個人的には「無用の学問」だったことになる。

だから、「〇〇は実学か」という問いを当該学問の内在的な価値に求めても虚しいことだと先ほどから言っているのである。「実学度」は市場の需要と大学の卒業生供給の関数であり、それ以外のファクターは副次的なものに過ぎない。その意味では実学の度合いは株価とよく似ている。「株取引は美人投票の高得票者を当てるゲームだ」という言い方がしばしばされる。自分の審美的基準はとりあえず棚に上げておいて、「みんなが誰を美人だと思うか」を推測する。自分の主観を封じて、「世の人々が欲望するもの」を正しく言い当てたものが株の売り買いのゲームの勝者になる。「実学」ゲームもたぶんそれと同じである。自分が

何を勉強したいのか、何を知らりたいのか、どんな技能を身につけたいのかといったことは「棚に上げて」、「市場ではどういふ知識や技能に高値がつくか」を読み当てたものにとりあえず「実学ゲーム」の勝者になる。ただし、勝者が勝者であり続けられる期間はあまり長くない。だんだん短くなっている。それだけの話である。

私は「役に立つ学問」というものに興味がない。それを識別することに何か意味があると思っている人にも興味がない。それはたぶん「お前のやっていることは何の役にも立たない」と若い頃から言われ続けてきたせいである。自分でも「そうかもしれない」と思っていたから反論もしなかつた。でも、自分にはぜひ研究したいことがあつたので、大学の片隅で気配をひそめて「したいこと」をさせてもらつてきた。私が三〇年にわたつて「何の役にも立たないこと」を研究するのを放置していきつた二つの大学(東京都立大学と神戸女学院大学)の雅量に私は今も深く感謝している。私が選んだ学問領域は四〇年にわたつて私に知的高揚をもたらし続けてくれた。私はそれ以上のことを学問に望まなかつたし、今も望んでいない。

特集*役に立つ学問?

あそびとしての基礎研究

有田正規

(国立遺伝学研究所教授)

基礎研究は面白いあそび

鬼ごっこの高オニは、高いところに登れば安全になる。凍りオニはいちど捕まると動けず、仲間の助けを待たねばならない。それ以外にも、公園で遊ぶ子供は、様々な鬼ごっこのバリエーションを編み出している。子供たちは使える環境を駆使する。そのときそのとき、自分たちが面白いと思う遊びを試す。殆どはうまくいかず、一回限りの遊びかもしれない。その中で、時間をかけて全国に伝わったのが、高オニや凍りオニなのだろう。これらは鬼ごっこの基本形といえる。

基礎研究も鬼ごっこに似ている。同じテーマが好きで集まった研究者は、基本となる研究から、それぞれにバリエーションを編み出す。殆どはうまくいかない。稀に面白い発見などがあると、興味を持つ人が増えて世界に広まって

いく。研究とは、このプロセスの繰り返しである。だから、少しだけ知的な「あそび」といえる。自分が見つけ出したあそびで、研究仲間が増えるならば上々である。

国の税金を使いながらあそびとはけしからん、という人もいるだろう。しかし、たんなる遊興とは違う。建築や芸における「あそび」と同じく、基礎研究は科学に必要な「ゆとり」である。芸とよばれるものの一つである。だから、国に余裕が無ければ基礎研究は推進できない。職人や芸人は、あそびを使いこなせないと一流になれない。同様に、基礎研究を推進できないと、国は一流になれない。むしろ、芸ばかり重視していても一二世紀初頭の北宋(中国)や一九世紀末のバイエルン(ドイツ)のように国を滅ぼす。要はバランスの問題である。

我々が基礎研究の現場でよく使う言葉に「面白い」がある。思いもよらない研究結果は面白いし、美しい理論を知

るのも面白い。いわゆる知的好奇心である。日本の研究者はみな、面白い研究成果を目指している。この単語は英語で funny とも interesting とも訳される。しかし、どちらともニュアンスは異なる。単なる funny でもなく interesting でもなく、面白い研究を目指すから、日本はイグ・ノーベル賞の常連国になる。欧米と異なる視点を編み出す国にもなれる。

残念なことに、自分の研究を「面白いあそび」と言える研究者は希少種になった。研究が大好きで別世界へ没頭してしまう人も評価されにくい。これは危機的状況ではないか。

天職としての基礎研究

大学教授を筆頭に、研究職といわれるポジションには普通の職業と大きく異なるところがある。それは天職と呼べるポジションで、簡単にいえば、変人向けということだ。マックス・ウェーバーに『職業としての学問』という名著

がある。この原題は“Wissenschaft als Beruf”、本来の意味は『天職としての学問』である。

基礎研究に携わる人たちは、研究を天職にできる変人なのである。学問とは、変人が変人なりに協力し、自分たちでルールを編み出し、数々の試行錯誤の結果、ようやく実を結んだ分野である。こうした悠長なプロセスを実現するには、携わる人たち自身が面白いがるあそびでないと、成り立たない。だから基礎研究が一般の社会に役立つ必要はない。経済的な価値を生む必要もない。成果を社会に役立たせ、経済的な価値を持たせるのは、一般人によるシゴトの範疇である。

基礎研究の性格は数学を例にとるとわかりやすい。π + π = 2π を満たす自然数 (n, m) は無いとするフェルマーの最終定理がある。フェルマー自身は証明を与えなかったため、この証明は多くの人を魅了し、数百年後に実を結んだ。最終定理がどのように社会に役立つか、筆者は知らない。しかし様々な解説本がある。ドラマや映画にできるかもしれない。

生誕二五〇年

漱石は世界を、世界は漱石を、どう読んだか

世界文学としての夏目漱石

フェリス学院大学日本文学国際会議実行委員会編

世界文学の一読者夏目漱石から、世界中に読者をもつ小説家夏目漱石へ。「世界文学としての夏目漱石」を可視化する試み。
A5判 本体2200円

岩波茂雄文集

全3巻 巻3 完結

植田康夫 編
紅野謙介 編
十重田裕一 編
一九八一年
一九八三年
一九八四年
一九八六年

(内容案内進呈)

四六判 本体各4200円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

(定価は表示価格+税)

<http://www.iwanami.co.jp/>

れない。少なからぬ経済効果があるだろう。これは極端な例かもしれない。しかし今、基礎研究とはそういうものだとする基本的な理解が失われているように思える。というのも、世の中における「基礎研究」の定義が変更されつつあるからだ。

政策における基礎研究の定義

日本の政策における基礎研究の意味を理解するには、文部科学省が発表してきた科学技術基本計画（以下、基本計画）がわかりやすい。基本計画とは科学技術振興のための五年計画で、現在は第五次にあたる。平成七年に施行された科学技術基本法（以下、基本法）の中で作成が定められ、その作成には研究者も協力してきた。概要や本文は全て、文部科学省のウェブサイトで公開されている。

平成七年に基本法が成立した理由は、「基礎研究の水準は欧米に著しく立ち遅れており、基礎研究の担い手たるべき大学・大学院、国立試験研究機関等の研究環境は欧米に比べ劣悪な状況に置かれて」いるからとある（基本法提案理由説明より）。当時、日本の大学にはポスドクに相当する制度が無く、科学研究費の総額も現在の三分の一以下であった。その状況を打開するために第一期基本計画（平成八〜一二年度）で策定したのが、競争的研究資金の拡充とポスドクター一万人計画である。第二期基本計画（平成一三〜一七年度）はその流れを汲んで重点四分野（ライフサイ

エンス、情報通信、ナノテク・材料、環境）に二〇〇億円規模の大きな投資がなされた。この流れを大きく変えたのが、第三期基本計画（平成一八〜二二年度）である。社会への説明責任や成果の還元が問われ、科学コミュニケーションという概念が登場し、「安心・安全」などの標語も生まれた。その中で、基礎研究の定義も示される。基本計画には「基礎研究には、研究者の自由な発想に基づく研究と、政策に基づき、将来の応用を目指す基礎研究があり、それぞれ、意義を踏まえて推進する。」と明記された（傍点は筆者）。そして第四期にはいる直前の平成二三年三月、東日本大震災が起きる。発表直前だった基本計画（平成二三〜二七年度）は大幅に見直された。そして八月に発表された内容には震災復興や危機管理、地球規模課題が掲げられていた。この時点で、基礎研究は「イノベーションの源泉たるシーズを生み出すもの……、広く新しい知的・文化的価値を創造し、直接的あるいは間接的に社会の発展に寄与するもの」とされている（傍点は筆者）。時代の要請とはいえ、イノベーションや社会の発展に寄与すべきという方向付けがなされたのである。第五期基本計画（平成二八〜三二年度）ではそれが更に先鋭化した。具体的には、「イノベーションの源泉としての学術研究と基礎研究」「戦略的・要請的な基礎研究の推進」といった見出しが使われるようになった。

基本法成立時に言及された、「欧米に比べ劣悪な研究環境」は無くなったかもしれない。引き換えに、イノベシ

ヨンのための基礎研究、戦略的基礎研究という概念が導入された。研究に目標が設定される場合、それを達成したのか評価する必要も生じる。評価をすれば格差が生じる。そうして大学や研究機関の間に序列が持ち込まれた。

競争は研究の成果だけにとどまらない。昔の国立大学や研究機関は軒並み法人化され、生き残りをかけた外部資金の獲得競争も強いられるようになった。国内研究費の採択件数ランキングや論文数ランキングといった、一次元の序列が当たり前になった。それどころか、世界大学ランキングのように、計算手法が不明瞭な総合指標まで登場している。一次元化の風潮に、個々の研究機関は苦勞している。こんな時代に、研究は「面白いあそび」などと言えるのは、大物か阿呆だけなのである。

学問の商業化、一次元化という陥穽

そうした環境変化を十分に知りつつも、多くの研究者は論文数を増やそうとする。つまり一次元化という流行に乗

ろうとする。なぜなら、研究熱心に見せたいからだ。くだらない論文を増やしても研究上の価値はない。しかし、長い業績リスト、報告書の成果欄いっぱい論文リストに何らかの満足感をおぼえる気持ちもよくわかる。こうした研究者の自尊心、虚栄心をうまく利用しているのが、特に海外の、商業学術出版業界である。

出版社は収入を増やしたい。しかし大学図書館からは絞りつくした。学術誌の価格はこれ以上つり上げられない状況である。(日本全体で年間三〇〇億円にも達するらしい)。そこで目をつけたのが、著者支払い型の学術誌創刊である。要するに研究者の自費出版だ。学術誌の知名度さえ上げれば、あとは研究者が研究費から、つまり税金から、いくらでも支払ってくれる。例えば *Cell Reports* という学術誌の掲載料は一報あたり五〇〇〇米ドル、*Nature Communications* という学術誌は五二〇〇米ドル。それでも、知名度に惹かれて掲載を望む研究者は後を絶たない。出版社にとつて、これほどよい儲け話はない。

高橋一行著

所有しないということ

「アガンのやラカンやジエクを読み進めて行き、そもそも所有はしなくて、も良いのかもしれない」ということを論じている。

三浦永光著

改訂版 現代に生きる内村鑑三

人間と自然の適正な関係を求め

人間の利己性と攻撃性の生物学的正当化理論の横行は内村の時代から表れていた。私たちはその克服の道に向き合うか。

A5判・二〇四頁・本体三〇〇〇円

菊判・二九六頁・本体四四〇〇円

日山紀彦著

廣松思想の地平

「事的世界観のヒポタムにおける発想枠とその理論構図と論理構制に関する著者なりの再確認のための覚え書きノート」。

永野善子著

日本／フィリピン歴史対話の試み

「コロバ化時代のなかで」

帝国アメリカのもとに日本とフィリピンを対峙させることで、日本における「知の植民地」状況を超えるための方向性を模索。

菊判・二八八頁・本体五八〇〇円

A5変型・二二二頁・本体二六〇〇円

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
<http://rr2.ochanomizushobo.co.jp/>

自費出版型の学術誌は、過去一〇年に一万タイトル以上も創刊されている。先進諸国の経済が停滞する中で、誰がみても異常である。そしてこれは政策のせいではない。研究者がランキングの弊害を知ってか知らずか、自ら招いている災禍である。学問が商業化されている環境を把握せず、自分の名誉欲や虚栄心を税金で満たそうとして、愚かな選択をしている。しかし、そう書く筆者も自費出版型の学術誌を利用する。なぜなら奨学金や博士号を取得したい学生のため、獲得した研究費による成果を早く出版するため、または共著者の要望など、様々な理由で使わざるを得ないのである。

こうして我々は、研究成果やデータを、お金を払って海外の出版社に渡している。それだけではない。こんどは渡した論文の分析結果を買わされる事態に至っている。論文の被引用数は、わかりやすい客観的指標である。とりわけ理系分野で重視されている。しかし、被引用情報はそう簡単に集められるものではない。国際レベルでこれができるのは、ごく限られた企業だけである。彼らは、研究機関の評価指標や活動分析という名目で、年ごとの分析結果を売り込んでくる。その対象は研究者や図書館ではない。ランキング等に気を揉む、大学や研究機関の執行部にアピールするのである。

まとめると、日本の研究者は、海外の機器を購入して研究を実施し、その成果を海外出版社にお金を払って発表し、

場合によっては著作権まで譲渡する。そのうえ、論文の分析結果まで買わされている。我々は、そこでお金を払いながら、計算方法もよくわからないランキングを眺めて一喜一憂しているのだ。嘆かわしいと言いたいようがない。

基礎研究の価値は自分で決める

この状況を打開するには、鬼ごっこの原則に一度立ち返ってみることだろう。あそびの面白さは他人に言われて決まるものではない。自分たちで決めるものである。研究の価値もそれに同じである。他人の評価を気にして研究をしてもつまらない。まして、研究の価値は掲載される雑誌名や被引用数で決まるものではない。

海外では、料金が高い学術出版社に対し、大学が抗議運動をおこなったり、契約のボイコットをしたりする。しかし日本では、そうした出版社への抗議活動は殆んど無いようだ。欧米の出版社から論文を出すことがステータスのように考えられていた歴史的経緯が影響しているのかもしれない。しかし今後、とりわけ自費出版型の学術誌に対し、出版費用を研究費から無制限に出せる制度は廃止したほうがよい。出版社と研究との関係を、根本から見直す時期に来ていると思う。

とりわけ重視したいのは、基礎研究成果の日本語による出版である。中国語等をさしおいて、英語ばかりが重要視される現在の初等・中等教育は問題に思う。日本の研究力

が強くなったのは日本語で教育できるからである。日本人が英語下手なのは、英語を知らなくても生活できるからである。最先端の研究まで母国語の教科書で学べる国はそう多くない。最先端科学の大学院教育まで母国語でできる国となると、数えるほどしか無いはずだ。今の英語・国際化ブームをみていると、そうした重要な文化遺産を自ら放棄しているようにみえる。

鬼ごっこと同じく、基礎研究の面白さも人づてに伝わるものである。日本語で魅力が伝わらない内容を、外国語で伝えられるはずがない。その点からも日本語による基礎研究の出版物を増やすことが重要だろう。我々は面白い研究を目指しているが、面白い研究は優れた教育につながる。優れた教育からは、優れた研究者が育つ。

実は、大学教員の本務は教育である。自らが研究をおこなうのは、それを通じて学生を教育するためである。研究と教育は同じコインの裏表にすぎない。二者がうまく噛み合って良い循環を生み出す仕組みを、英語・国際化ブームと折り合いながら実施していくことが必要である。中でも一番重要なのは、母国語による優れた出版を研究者たち自身が評価し、推進することだろう。

特集*役に立つ学問？

嘘の探究

明星聖子 (埼玉大学教授)

あの人は嘘がつけない人なんです。

恋人フランツ・カフカについて、ミレナ・イエセンスカが語った言葉である。二人は、チェコ人ジャーナリストのミレナが、カフカの作品をチェコ語に翻訳したことがきっかけで出会った。当時ミレナは既婚、いっぽうカフカは、ある女性との二度の婚約破棄のあと、別の女性と三度めの婚約中だった。

カフカの友人マックス・ブロートに宛てた手紙のなかで、ミレナは、カフカがウィーンでのデートを、「嘘をつけない」ことを理由に断ったと、こう嘆いている。

あの人は休暇を願い出ることができなかつたのです。私に会いに行くと局長さんにいえなかつたんです。他に何か口実を、というときまた驚愕したような手紙がきます。なんだって？ 嘘だって？ 局長さんに嘘をつ

けだって？⁽¹⁾

ミレナのその手紙によれば、カフカは、「タイプがとて早く打てるから」という理由で、勤務先の上司である「局長さん」を尊敬していたという。また、彼女の夫が「一年に百回も浮気をする」と聞いて「畏敬の念で顔を輝かした」という。

実務に長けた役人や女たらしの夫とは彼は違う。彼には、俗な世間を生き延びる能力はない。彼女がいたかつたのは、そういうことだろう。

私たちが、見かけはなんとか生きていられるのは、いつかは嘘に逃げ込んだからです。盲目、熱狂、楽天主義、確信、悲観主義、あるいはその種の何かに――。⁽²⁾

〈日本のモノ作り〉を改めて見直す!

モノと技術の 古代史

全4冊
刊行開始

●**金属編** 村上恭通編
6000円
〈続刊〉木器編／陶芸編／漆工編

〈総合資料学〉の 挑戦

異分野融合研究の最前線
国立歴史民俗博物館編 3200円
日本の歴史研究を次のステージへ。

政治、宗教、そして造形、天皇の力の
ありようを美術作品から照らし出す。

天皇の美術史

全6巻刊行中 各3500円

- 治天のまなざし、王朝美の再構築
〔鎌倉・南北朝時代〕
……伊藤大輔・加須屋 誠著
- 朝廷権威の復興と京都画壇
〔江戸時代後期〕
……五十嵐公一・武田庸二郎・江口恒明著

繁栄と独自性の源はここにあった!

古代の東国

全3巻
刊行中 各2800円

- 前方後円墳と東国社会 古墳時代
……若狭 徹著
- 坂東の成立 飛鳥・奈良時代
……川尻秋生著

時代の流れを平易に描く通史!

日本近代の歴史

全6巻完結 各2800円

- 維新と開化……奥田晴樹著
- 〔主権国家〕成立の内と外
……大日方純夫著
- 日清・日露戦争と帝国日本
……飯塚一幸著
- 国際化時代〔大正日本〕
……櫻井良樹著
- 戦争とファシズムの時代へ
……河島 真著
- 総力戦のなかの日本政治
……源川真希著

現代語訳 **小右記** 全16巻
刊行中

■ 敦成親王誕生 (第4回)
寛弘2年(1005)4月～寛弘8年(1011)12月
倉本一宏編 2800円

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151 / 価格は税別

しかし、彼はそれができない。言い逃れもごまかしもできず、身を守ってくれる避難所に逃げたことなど一度もない。「酔っ払うことができないのと同じように、嘘をつくことも絶対にできないのです」。(3)

ミレナは力説する。カフカは嘘がつけない、と。

が、そうだろうか。本当に彼は嘘がつけないのか。

彼女は、本当にそう信じているのか。自分の手紙を信じているのだろうか。

ミレナとの恋が終わったあるとき、久しぶりに彼女に宛てた手紙で、カフカはこう告白している。

私の人生のあらゆる不幸は(……)手紙から、いや手紙が書けるという可能性から生じています。人間は私を欺いたことはほとんどありません。しかし、いつも手紙が、それも他人の、ではなく私自身の手紙が、私を欺いたのです。(4)

私の手紙が、私を欺く。

意味しているのは、本当のことを書いているつもりで、嘘を書いてしまったということだろう。

自分の手の下で成立していく手紙を読みながら、カフカはこんな自問を繰り返したにちがいない。私が伝えたかったことは、本当はこれだったのか、これが私の本当の気持ち、私も知らなかった本心だったのか。

言葉は、私の真実を伝えない。なぜなら、言葉は、私にとっては不完全な、社会のための道具だからである。公的な言葉は、個人の私的な思いを、ありのままの完全な形ではけつして媒介しない。必ず何かをこぼれさせ、何かを余分にまとりつかせる。私にしかわからない私だけの何かを、言葉で伝えることは、理論的に不可能である。私的言語は存在しない。

カフカは手紙の続く箇所、私のこの不幸は、私だけの不幸ではなくて、「一般的な不幸」なのだと言っている。「手紙が簡単に書けると思っていること」で、「魂の恐ろしい錯乱」がもたらされている。手紙を通じての交際は、「亡霊との交際」に他ならない、と。

人間が手紙で交際できるなど、どうして考えついたのでしょうか！ 遠くの人なら思いをさせ、近くの人なら抱きしめられる。それ以上はすべて人間の力を超えています。手紙を書くとは、じっと待ち構えている亡霊たちの前で裸になること。書かれたキスは目的地に届かず、途中で亡霊たちに飲み尽くされます。この豊かな食べ物で、彼らはとてつもなく増殖していくのです。⁽⁵⁾

たしかに、亡霊たちは途方もなく大量に増殖した。

現代は、かつてない規模の手紙の時代、電子の手紙の時代である。

電子メールはもちろん、LINEであろうと、「Twitter」であろうと、Facebookであろうと本質的に書かれた言葉のメッセージを伝える手段、手紙にほかならない。

日々スマートフォンを片手で操作しながら、私たちは誰もが、手紙を簡単に書けると思っている。気軽に、

簡単に、手紙で、思いを届けられると信じている。

私たちは、恐ろしく不幸な時代を生きている。

カフカによれば、はるか昔から人間はこの危険を知っていたのだそうである。だから、交通機関を発達させてきた。直接に会って話をする。目と目を見合って、理解する。肌を触れあって、慰め合う。亡霊同士ではなく、人間が人間と交わるため、私たちは、できるだけ速く、できるだけ遠くに行き着けるよう、懸命に技術を開発してきた。「人間の間からできるだけ亡霊じみたものを閉め出して、自然な交わり、魂の平和を得るために、鉄道や車や飛行機を發明しました」。⁽⁶⁾

しかし、間に合わない。なぜなら、通信手段の発達は、交通手段の発達をはるかに凌駕して進むからである。

それらは、明らかに転落のさなかなにされた発明なのです。相手側ははるかに冷静に、はるかに強大になつて、郵便のあとに電報を、それから電話を、さらには無線電信を發明しました。⁽⁷⁾

カフカの予言は当たっている。

向こうは続いて、インターネットを發明し、ついに大勝利を収めた。亡霊たちにパラダイスがもたらされた。

いまや莫大な量の亡霊たちが、好き放題に出会い、交わ

り、増殖し、人間を欺き続けています。亡霊が跋扈する時代、本当のこと、真実が置き去りにされるのは必然である。

だから、「脱真実」(post-truth)なのである。(9)

最近巷を賑わせているこの新しい言葉は、端的にいえば、もはや真実には価値がないという意味である。本当のこと、嘘も、デマもインチキも、すべてが同等に扱われる。

この震撼すべき事態は、つまり手紙の不幸の延長線上にある。

すでにカフカは、未来を絶望している。「亡霊たちは飢えることはなく、しかし私たちは破滅していくでしょう」。(10)

カフカは嘘の名手だった。

ウィーンでのデートに行けなかったことを、ミレナに宛てた手紙で、こう説明している。

行けなかったのは、役所で嘘がつけなかったからだ。もち

ろん、役所でも嘘はつける。が、それは二つの理由から

だだけだ。不安の念からか（これはもうオフィスにはつきもので、だから僕はとっさにすらすらインスピレーションのままに嘘がつける）、あるいは本当に緊急の場合か（だから「エルゼ病気」だ——でもエルゼ、エルゼであって、君、ミレナじゃない。君は病気になつてはならない。もしそうなら、それは緊急の緊急であって、論外だ）、つまり緊急のときは嘘がつける、そのときは電報も要らない。緊急というのは、役所にも負けないんだ。だから、許可があるうがなかるうが僕は出かける。でも、僕が嘘をつくあらゆる理由のうちで、幸せが、幸せが緊急に必要というのが主な理由のとき、このときは嘘がつけない。(11)

右の箇所からは、二人の間で、すでに嘘が了解事項となつていたことが読みとれる。「エルゼ病気」というのは、二人が申し合わせていた嘘の電報の文言である。この嘘を

夢遊病者たち

第一次世界大戦は
いかにして始まったか [全2巻]

クラーク 史上初の世界大戦の
発火点とその背景を克明に描いた、
第一次世界大戦研究の決定版。
小原 淳訳 ①¥4600 ②¥5200

中国安全保障全史

万里の長城と無人の要塞

ネイサン&スコベル アメリカ
の中国論の権威による第二次大
戦から現在までグローバルに鳥
瞰した基本書。河野純治訳 ¥4600

〈和解〉のリアルポリティクス

ドイツ人とユダヤ人

武井彩佳 ホロコースト加害者と
被害者を和解させた国益と償
いの理性的鏡合。ドイツ戦後処
理を実証的に再検証する。¥3400

ハンザ 12-17世紀

ドラングェ 中世北欧交易を支
配した最大かつ最長の都市共同
体の制度、文化、歴史を余すこ
ろなく詳述。高橋 理 監訳 ¥5500

歴史の工房

英国で学んだこと

草光俊雄 『明け方のホルン』で
文名を馳せた社会経済史家の特
望のエッセイ選。Pパークから
鷗外、柳宗悦までを語る。¥4500

哲学とはなにか

アガンベン 詩と哲学と音楽の
始原を追って、奪われた音声と
文字化を基礎にした西洋の知の
弱さを考察。上村忠男訳 ¥4000

シベリア抑留関係資料集成

抑留の経緯から各地の抑留実態、
帰還及び帰還後の問題、冷戦下
の駆引き等、初の資料集193編。
[内容見本呈] 富田・長勢編 ¥18000



東京文京本郷
5丁目32-21
tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税別)
http://www.msz.co.jp

理由に、休暇を取るといのが二人の間の約束だった。

既婚女性と婚約中の男。そもそも嘘がなければ、成り立たない関係だろう。

僕は嘘がつけないと、たしかにカフカは繰り返している。僕が嘘をつけるのは、「不安」か「緊急」の二つの場合のみ。けれども、「幸せ」が理由のとき、「幸せが緊急に必要なとき」には、どうしても嘘がつけない。

なんと見事な嘘だろう。

ミレナも嘘がうまかった。ブロートへのあの手紙を出す前に、彼女はこの手紙をすでに受け取っていた。

つまり、ミレナはわかっていた。カフカが嘘をついていると十分に知っているながら、彼は嘘がつけないと嘘をついた。

なぜなら、その嘘にしか、真実はないから。

彼の嘘を嘘だと認めてしまうことは、何を意味するのか。自分に会いにこなかった男の嘘を、本当だと嘘をつくことでしか、彼女は、自分の本当のことを言葉にできなかった。

あの手紙は破滅を予言する言葉で、締めくくられているわけではない。

何を書くのが、手遅れだと繰り返しながらも、カフカは、まだ何かを書く必要を示唆する。「少なくとも〈やつら〉に、正体が見破られていると示してやることになるのです」。

正体を見破る。

これしかもはや、抵抗の手段はないのだろう。

嘘を読んで、そこに込められた真実を読み取る。真実を読んで、そこに込められた嘘を読み取る。

亡霊の時代、脱真実の時代、私たちが、人間として理解しあおうとするなら、私たちは、徹底的に嘘を学ばなければならぬのかもしれない。嘘のつき方と嘘の読み方を学ばなければならぬのかもしれない。

真実に価値がないなら、嘘にも価値がない。嘘に価値があるのなら、真実にも価値がある。

したたかに、守り、抗い続けていくべきなのだろう。この信用のならない言葉で。

生きのびるために、私たちには嘘の探究が必要である。いまこそ、「文学」が必要である。

(1) この手紙は、一九二〇年八月初めに書かれたと推定されている。Vgl. Wagnerová, Alena (Hrsg.): "Ich hätte zu antworten rage- und nachklang". Die Briefe von Milena. Mannheim 1996, S. 42. 7) (文獻からの抜粋を含むミレナの記事や手紙の邦訳書には次のものがある。ミレナ・イエセンズカー『ミレナ 記事と手紙——カフカから遠く離れて』(松下たえ子編訳、みすず書房、二〇〇九年)。なお、本稿でのドイツ語文献からの引用はすべて、さまざまな既訳を参考させていたが、著者自身が訳出した。

(2) Wagnerová, a. O., S. 43.

(3) Ebd.

- (4) この手紙は、一九二二年三月末に書かれたと推定されている。Vgl. Kafka, Franz: Briefe an Milena, hrsg. von Jürgen Born und Michael Müller. 2. Aufl. New York/Frankfurt a. M. 1983, S. 301. 「エルゲン・ポレン」/「ビヤヘル・ミテラー」編『カフカ ミレナへの手紙』池内紀訳、白水社、二〇一三年]
- (5) Kafka: Briefe an Milena, a. a. O., S. 302.
- (6) Ebd.
- (7) Ebd.
- (8) よく知られているように、昨年(二〇一六年)十一月、オックスフォード英語辞典(Oxford Dictionaries)は、「今年の単語(Word of the Year 2016)」に「post-truthを選んだ」。
- (9) Kafka: Briefe an Milena, a. a. O., S. 302.
- (10) この手紙は、一九二〇年七月三十一日に書かれたと推定されてきた。Kafka, Franz: Briefe 1918-1920, hrsg. von Hans-Gerd Koch, New York/Frankfurt a. M. 2013 (Schriften Tagbücher Briefe. Kritische Ausgabe), S. 268. カフカの手紙は、一九九〇年代より、名宛て人別ではなく、編年体ですべて並べられる形で、「批判版カフカ全集」(Kritische Kafka-Ausgabe)の枠内で新たな編集が進められている。この手紙が収録されている「一九一八年から一九二〇年」の巻は、目下の最新巻であり、一九二一年以降の手紙については、まだ新編集では読むことができない。「亡霊」の比喩を語っている一九二二年三月の手紙(注(4)参照)が、旧編集のものからの引用になっているのはこのような事情による。
- (11) Kafka: Briefe an Milena, a. a. O., S. 303. カフカにとつての「書くこと」は、「この「正体を見破ること」「いいかえれば言葉の虚偽を見抜くこと」、おそらく非常に強く関連している。たとえば、初期の短篇集『観察』(一九二二年)に『詐欺師の正体を暴く』というタイトルの小品があるが、それなどは創作活動の出発点がそもそもそこにあつたことの表れだろう。この小品の読解を含む、こ

うした観点からのカフカ理解については、拙著『カフカらしくないカフカ』(慶應義塾大学出版会、二〇一四年)で詳しく示している。興味のある方はそちらを参照されたい。なお、本稿での記述には、その拙著と若干重複する部分があることをおことわりしておく。

特集*役に立つ学問？

デュアル・ユースのトリック

——そこに織り込み済みになっているのは、軍事研究の推進だけなのだろうか？

塚原東吾（神戸大学教授）

そもそも何かがおかしい。

デュアル・ユースという言葉は、なんだか都合がよい言葉らしく、最近では世間でよく聞くようになっていく。北海道大学の川本思心によると、この言葉が多用されたのは極めて最近のことで、アメリカでのバイオテロ（炭疽菌によるもの）のあった二〇〇一年頃に初めて新聞などに登場し、第一次安倍政権の頃（二〇〇六年前後）には日本の軍備増強の意図をもって流布されたという。さらに軍事研究を危惧している学術会議が「科学技術の用途両義性」を定義づけた二〇一二年以降に、本格的に人口に膾炙した言葉であるという（川本思心「デュアルユース研究に対する市民の意識」、『科学技術コミュニケーション』、一九号、一三五—一四六頁、二〇一六年など）。

この言葉が一般に流布しだすプロセスを見ても、この言葉の持つ「軍民両用」を意味する面が、特に強調されてい

るように思われる。つまり民間に転用できる「よい軍事研究」というものがある（まさに軍事は「デュアル」のひとつの極であるだけである）という印象を与えることができるのがこの言葉に付与された機能のようにも見える。だが、ここにこの言葉の第一のトリックがある。

このトリックについては注意が必要だ。なぜなら、軍事研究に少しでも関連するような科学技術の研究には「絶対に反対」とするというのは、多分、無理筋なのかもしれないと思わせるような効果がこの言葉にはあるからである。つまり軍事たりとも「デュアル」であるから、良い面も持つということを暗に示唆している。良い面もあるのだから、軍事研究は必ずしも悪くないのだという意味合いが、この言葉に織り込まれている。これは敢えて（哲学的な言語戦略としては）「二元論」や「局在論」（つまりデュアルという言葉）を前面に出して使うことで、喧嘩両成敗ではないが、

まあ、ここはどっちもやっておこう、とりあえずは両方を見据えながら、「中庸」を選びましょう、ということになるような落としどころを待ち構えている言葉でもあるからだ。

原爆と物理学の関係を考えるなら、この難しさがわかるだろう。原爆は言うまでもなく、無差別テロに使われる毒物（最近の VX ガスなど）の開発が悪いことは当たり前だ。だが人類は、物理学や化学の成果や知見を根こそぎ否定できるであろうかという、これは難問である。科学や技術に両面性があるなんて言うことは、ある意味で、何度も書くが、しごく「当たり前」のことなのだ。

いくつものバリエーションで、このような問題に対する答えが考えられる。悪い面があっても、「基礎研究は続けるべきである」という湯川秀樹のとったスタンスや、武谷三男が主張したような体制との関係のなかで科学技術の善し悪しを勘案する立場、広重徹が論じ中山茂と吉岡斉が本格展開したように、制度（体制化）を見据えて論じる見方などである。長い議論があるのだが、科学や技術の先端的な研究は、とりあえずは捨て去るわけにはいかないというあたりで、大体の議論は落ちが付く（戦後の軍事研究をめぐる議論については、杉山滋郎の最近の著作、『軍事研究』の戦後史（二〇一七年）が実にクリアに戦後の議論の歴史を整理している）。

だから逆に、今頃になってことさらに「両面性」（デュ

アルであること）が強調されている時に、そこには何やら底意地の悪い「意図」が含まれているのではなからうかと、デカルト的な懐疑心を発揮するのは、健康なことだろう。

少しでも健康な懐疑を發揮して考え出してみると、どうもこの言葉は一筋縄では行きそうにない、ややこしい背景があることも感じられる。

なぜならこの頃では、いわゆる「現代のイノベーション」とか、「先端科学技術の高度化や複雑化」の時代である（とされている、というのが本当のところだと思っただが、ここはとりあえず、そうしておこう）。なかでも IT 革命（情報技術）やロボティクス、さらに地球規模での電子ネットワークを利用した遠隔操作技術がスゴイ勢いで発展しているというのはいくつものバリエーションで、このように思える。それらを操作する側の IA やニューロ・エンジニアリングなども含めると、軍事研究と民用の科学研究の境界がかなり曖昧（両義的）になっている、だから今は、軍用と民用をまとめてデュアルに研究を進めておこうというような主張も、細かいことは本当はよくわからないのだが、まさによくわからないがゆえに、押し進められていることを敢えて止めようというのもなんだかな、となる。

これもトリックの重要な要素である。いわゆる「切り分け問題」というやつだ。軍事と民用の「切り分け」は難しい。そもそもどこからが軍事研究なのかという、定義をはっきりさせることはたしかに無理なことだと思う。でも、

ここでは話の順序が逆だ。切り分けは無理だから、両方まとめてやっておいたらどうだろうという論理を持ち出すために、この「切り分け問題」が持ち出されている。

ここでは少し立ち止まって、この言葉を解体して、「デュアル」と「ユース」に分けて考えることが必要だ。

大体からして、「デュアル」とは、何と何が並んでいるのだろう。

また「ユース（使用）」とは、それが当然のこととして述べられているが、だれが何を、そしてどのように「使う」というのか。

そもそも、科学や技術を「使う」ことは、前提として組み込み済みなのだろうか？

だいたいいからして「知」とは内省や徳を高めるためのもので、何かの実用に供するように「使う」ことなどは、たいてい重要なことと思われてこなかったという伝統も、人類の知の長い歴史のなかにはある。だからここで、「使えないものはダメである」とでも言いだしそうな「ユース」を前提にして、「デュアル・ユース」といきなり語り始められても困る。「利用至上主義」とも言いうるような意味合いをすでに含んでいるかのような語感が、この言葉にはある。こんな風に、時代を流行で掠おうという風のある「デュアル・ユース」という言葉には、そんな伝統など「親の仇デュアル」と言わんばかりの（そのように無謀な「近代日本」を引っ張って来た、福沢屋の諭吉さんの）勢いがある。

だがこのエッセイでは、この「ユース」の方について、あまり書き込む紙幅がないので、この辺までしておく。

むしろここでは、「デュアル」ということについて、もう少し詳しく考えておきたい。この言葉がもつ、軍民の両用性という意味は、それほど単純なことではないというのが、現代科学論（特に資本主義と深部で結託した科学技術への歴史的分析）から見た実態である。

たとえばこの「デュアル（両用性）」という問題については、もつと複雑で暗い（ダークサイド？）な面がある。

たとえばCIAが立ち上げた「J・Q」¹⁾（日本語ではインクテルとか、イン・キュー・テルとか呼ばれている、ここからはインクテルという呼称を採用する）の例について考えてみるなら、その奥行きや現代的な複雑性の一端が見えてくる。

デュアルの含む両面性が、軍用・民用の両義性というだけではなく、社会的・文化的そして経済的に複雑に仕組まれた襞のなかに、丁寧かつ大雑把に織り込まれていることが見えてくるだろう。このインクテルというのは、CIAが立ち上げた「非営利」の「ベンチャーキャピタル（V C）」で、I T分野を対象としているものである。CIAとは、アメリカ合「衆」国の諜報部の中枢にして謀略機関でもあるアメリカ中央情報局である。

政府機関であるCIAが立ち上げたこの非営利ベンチャーは、新しい市場モデルを提示していると言われている。そもそも「非営利」だが、実際にはけっこうなキャピタル・

先駆例となり、またイノベーション政策のモデルとなっているという（小林信一「CIA In-Q-Telモデルとは何か——IT時代の両用技術開発とイノベーション政策」、国立国会図書館調査及び立法参考局、レファレンス、七九三号、二〇一七年二月）。そもそもCIAは現代社会のITイノベーションの速さについて行っていないことを危惧して、この組織を立ち上げているという。そしていうまでもなく、（サイバテロがひとつの好例だが）、IT分野でのイノベーションは、ビジネスモデルを含めて、それそのものが軍事的な戦略性を持つものである。

こうなってくると、軍事技術については、クラシックな「陸軍登戸研究所」や「七三一部隊」のようなかたちをイメージしていても追いつかないだろう。ましてやナチの軍事技術をや、である。いまや市場メカニズムや情報技術が相互に重なったなかで、新たな「戦略的技術開発」が展開しているというのが実態だと言える。ベンチャー企業やゲーム産業が、CIAの立ち上げたベンチャーにとって重要なターゲット層になっていて、そこからあがるキャピタル・ゲインもかなりのものになっているというのが、二一世紀の現実のようだ。前記の小林信一によると、有名企業であるグーグル社が衛星地図ソフトのEarthSystemを開発するKeyhole社（このインクテルの出資先）を買収して、現在ではグーグルアースに組み込まれているという。ここで開発された3Dマッピングの基盤技術は様々な種類の

システムに應用されており、たとえばKeyhole社のCEOであったジョン・ハンケは、その後グーグル社のグーグルアース担当の副社長を経て社内ベンチャーであるニアントイック・ラボを立ち上げ、これをニアントイック社として独立させている。このニアントイック社が、「ポケモンGO」のサービスを開始したのが、二〇一六年七月であったことは、われわれの記憶にも新しい。ほかにもラスベガスのカジノのビッグデータの処理や、データマイニング、サイバーセキュリティなどにかかわるベンチャーや、大学と組んだ3Dプリンタの開発、ドローンの試作なども、インクテルの出資先である。ポケモンGOも、言うならば、CIA関連のデュアル・ユースが生み出した立派な生産物のひとつだったのである。軍事化という単純な問題ではなく、〈帝国〉国家の情報機関が設立したベンチャー企業を通じて、資本主義的な原理が知識生産の深部を掌握しだしているという、より深刻なシステムとしての問題が「デュアル」という概念には含まれているのではなからうか。

では、このような情報技術や先端科学の展開があるから、そして軍事と民用の境界があいまいになっているから、そこでは何をしてもよいかという、そういうわけにはいかない。もちろんビッグデータやITの進歩で、われわれの知的環境が激変しているということは認めたとしても、（むしろ古典的な収奪的資本主義の論理が知的領域にまで貫徹

し始めているだけなのかもしれないが、ここではその問いは一時的にサスペンドにしておこう)、軍事分野が独走態勢を作り出すような状況が生まれることには、どこかで歯止めをかけることが必要である。なにしろ軍事研究には、「秘匿性」や「非人道性」など、かなり危険なおおいが立ち込めている。少しでも歴史に気を配るなら、軍事科学のもたらした災厄は、枚挙に暇がない。デュアル・ユースという言葉は、たしかに軍事研究は悪いのだけど、役に立つこともある(民用もできる)のだから、もっと(軍用の)科学技術研究を進めてもいいのでは、という含みが持たされていると感じられることが、多分、最も大きな問題だと思ふ。

これに、市民として危惧を感じたとしても、あながちの外れではないだろう。何かのかたちで、歯止めが必要だ。科学史を少しでも勉強したことがあれば、科学や技術が「デュアル・ユース」であるというのは、「当たり前」であったことに気が付くはずである。だが時代性が入るとさらにややこしい。つまり、「先端的な科学技術では、各領域間

の融合が進み云々」という枕詞が付くようになる。これには一瞬、怯まされる。なるほど、情報技術の発達は扱えるデータ量が級数的に増えているし、バイオと呼ばれる生命科学の領域の進展は目覚ましいものがある。

だが、ちよつと立ち止まって、科学史を振り返ってほしい。なにも特段、今の時代の科学が「特別に融合」しているのではなく、科学や技術はいつでも、「すでに・常に」、デュアル・ユースといえば、デュアル・ユース「の」ようなもの」ではなかったのだろうか？ なぜこんなに「デュアル・ユース」という言葉がはびこることになったのだろうか？ このことについては冒頭で、北海道大学の川本思心の見解を挙げた。日本でこの語が流布するようになったのは、まったく最近のことだという。ということとは、この語自体が、ある種の時代性、それも一定の「キャンペン性」を帯びた言葉なのではなからうか？

基本憲法I

基本的人権

木下智史

伊藤 建(著)

憲法事例問題を解くために最も実践的なテキスト。「事例研究 憲法」の木下教授と、大人気ブログ「憲法の流儀」の伊藤弁護士の最強コラボ! ■3,000円+税

日評ペーシック・シリーズ

経済学入門

奥野正寛(著) ■2,000円+税

大学1年生向け入門書。経済学の基本的な考え方を述べて、ミクロとマクロの経済の動きをどう理解するか。

財政学(仮題)

土居文朗(著) (4月上旬刊行)

財政について経済学の視点から考えていく力が身に付く入門書。日本の財政の制度的な側面も学べる。 ■予価2,800円+税

アスペルガー症候群の大学生

教職員・支援者・親のためのガイドブック

ロレーヌ・E・ウォルフほか(著)

藤川洋子(監訳)

アスペルガー症候群の学生への対応に悩む大学職員向け支援マニュアル。就職活動への対応等、日本の実情に合わせて翻訳。 ■3,000円+税

「自動運転」革命

ロボットカーは実現できるか?

小木津 武樹(著)

200年ぶりの交通革命をもたらす「自動運転」とは? 気鋭の研究者が「自動運転の現在と将来のビジョン」を示す。 ■1,600円+税

数学ガイダンス 2017

数学セミナー増刊 ■1,600円+税

数学セミナー編集部(編) 新入生がすぐに知りたい情報をお届け! ■「巻頭インタビュー」真鍋大度氏が語る「数学を勉強することの強み」とは?

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
☎03-3987-8621 <https://www.nippyo.co.jp/>

命の形 一形の命

相反する要素が
めめを合わなければ
進歩は進めぬ
William Blake

現代人は
あらゆる知識を広く知ることが
定数である
Arnold Toynbee

情報機器は人の知覚能力を拡張させる

暗がりで見える
遠くの音が聞ける
その機器によって 私は監視される

情報機器は次第に小さくなり
身体の一部にまでなってしまった
次の時代には入墨のように
皮膚化する

近い将来、全世界の情報を
角砂糖1つ位の大きさのメモリーに
取められるそうだ

情報機器は次第に身体化し
空気と同じような存在になる
それが無いと窒息する

機械は君を幸せにも不幸にもする

携帯を片手に持っていないと
不安になる新型の精神病患者

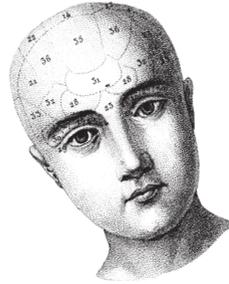
物質文明が自然を破壊したのなら
情報化社会は人間を破壊する

情報を出す人が
情報を受ける人を
支配する

農業社会 → 生産の目的が目的
工業化社会 → 製品の目的が目的
情報化社会 → 話題の目的が目的

情報化社会は物を生産するの目的
どこか違っている
それは人間の脳に開く
個人間の記憶は
それは人間の脳に集積され
どこか違っている

個人間の記憶は
巨大なコンピュータになる
世界脳と呼ばれるものになる
そのコンピュータの細胞の1つになる



<http://ftp.arl.army.mil/ftp/historic-computers/>



時間を早めし、遅らせるのだ
時間を早めし、遅らせるのだ

量子コンピュータが開発されれば
現在100年かかる計算が僅か1秒でできるそうだと
すると、人間の寿命も何億年も伸びたことになるのかな

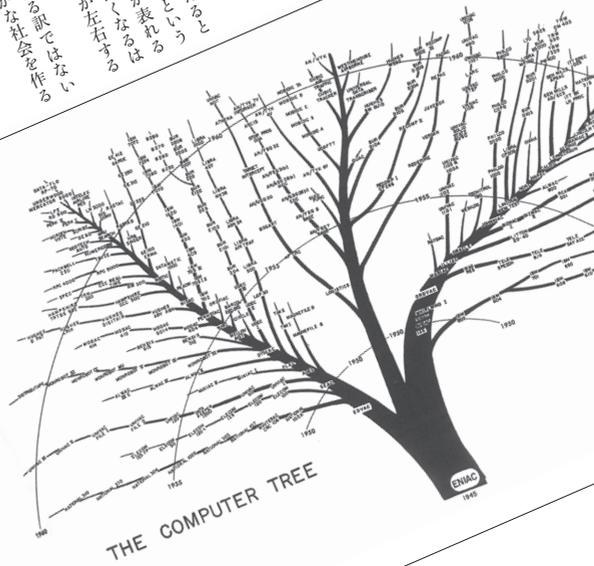
美しいものを見分けられるのはいつか。
コンピュータが開発されるのはいつか。



情報の量が豊かな社会を作る訳ではない
情報の質が豊かな社会を作る
全体が騒音化すれば
無音が恐怖になる

読める、読めない、読みたくなくなる
この限界点が左右する
情報量が限界を越えると
感覚閉鎖という
生理的な拒否反応が表れる

ソーシャルメディアに
自分のコピーを送り込む
その自分は
普段の自分とは違った人格を持つ自分



進化することで、失うものもある
進化とは、それ以前より優れていること

■ ソーシャル
ネットワークとは
世界を駆け巡る
非戸端会議

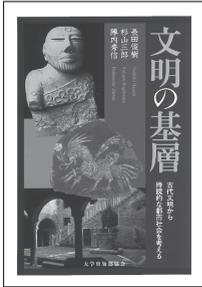
中垣信夫 | グラフィックデザイナー
Nobuo NAKAGAKI | Graphic Designer



大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2015年7月刊】

2014年5月に千代田区立日比谷図書文化館で開催された市民シンポジウム「文明の基層」(総合地球環境学研究所・京都大学学術出版会・大学出版部協会 主催／活字文化推進会議 後援)の内容をブックレット化しました。



長田俊樹 おさだとしき(総合地球環境学研究所名誉教授、神戸市外国語大学客員教授)
杉山三郎 すぎやまさぶろう(愛知県立大学大学院特任教授、アリゾナ州立大学人類学部教授)
陣内秀信 じんないひでのぶ(法政大学デザイン工学部教授)

文明の基層

古代文明から持続的な都市社会を考える

A5判・80頁／定価(本体1,200円+税) ISBN978-4-13-003152-3

古代都市のイメージは大きく変わりつつある。インダス文明の諸都市のゆるやかなネットワーク、中米の古代最大都市テオティワカンでの新しい発見。人はなぜ都市を作ってきたのか、その歴史的基層を中世ヨーロッパのヴェネツィアと比較しながら、改めて都市の魅力と未来への可能性を探る。大学出版部協会ブックレット第3弾。

〈主要目次〉

第一章 インダス文明：ネットワーク都市——中央集権的文明観を覆す(長田俊樹)

「大河文明」は本当か？—広大なインダス文明／インダス文字とインダス印章／草原の遺跡、海岸沿いの遺跡—大河から離れて／砂漠の遺跡の謎／「城塞」と「パスポート」—都市ネットワーク論に向けて／墓から見えるもの—一格差の不在／砂丘が先か、文明が先か／インダス文明は大河文明ではなかった—農業と水害の視点／古代文明観を見直す—「穀物倉」と「アリア人侵入説」／文明の衰退について考える／ゆるやかなネットワークの存在／都市社会をどう見るか—中央集権的文明観からの解放

第二章 新世界最大の古代都市テオティワカン：英知の集積としての都市(杉山三郎)

閉ざされた空間の多様性／文明の萌芽／認知能力＝知恵こそが、文明の基盤をなす／中規模都市ができ始める／完全計画都市、テオティワカン／多くの人を迎える巡礼地として／暦と数の体系／「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」の二元性／墓は語る／古代人の交流—物を集めるネットワーク／文明の確立から崩壊へ—伝わり、つながる文明の諸要素

第三章 水都ヴェネツィア：交易都市から文化都市へ(陣内秀信)

水と共生する町、ヴェネツィア／逆・中央集権的構造都市—複雑に交差する水と陸のネットワーク／都市を解読する／交易都市から文化都市へ／オリент志向と柔軟性／分散的都市から統合的都市へ／なぜ都市に人が集まるか／城壁の無い町／都市モデル再考／川が結ぶネットワーク／水車の活用／考古学調査がヴェネツィアのイメージを変える／ヴェネツィアの食と産物のネットワーク／ラグーナは自然・環境・歴史の宝庫—文化都市から環境都市へ

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

国際図書館展への専門家派遣

協会では二〇〇四年から出版文化国際交流会と提携して、海外国際図書館展に加盟出版部の人員を派遣し、展示書籍の案内や講演会など多彩な活動を行ってきた。今年はいンドのニューデリーであったが、遡ってみるとモスクワが二回続き、その後リトアニア、プラハ、ベオグラード、ワルシャワと東欧圏が続き、二〇一〇年代はリヤド、アブダビ、ドーハと中東諸国が続いた。リヤド報告によれば、サウジでは一日五回の礼拝の時間がきたら人々は会場からモスクへ移動してしまい、講演会では中央のフェンスをはさんで男女が分かれて座るということである。こうしてみると国際交流とはまずは互いの「国柄」を識ることなのかも知れない。

容易ではない大学出版部の新設

思えば協会では長く「大学出版部とは何か」という命題をかかえ、それについて仲間うちでも議論してきたような気がする。それは母体大学との実質的關係をどう培うかであったり、出版部独自のエディタースhipをいかにして獲得するかなどであった。某日、都内の大学で事務方を担う方から事務局に一本の電話が入り、本学の教員有志から学内に出版部を立ち上げてくれないかと声が上がって

るが、協会で、ゼロから出版部を作る秘訣があるならばひ教示頂けないかというのである。私にはこうした時に決まってしまう出ることがあって、それは以前『大学出版』で読んだことがある、法政大学出版局編集長だった稲義人氏が語ったという話である。バックナンバーを当たってみたら、本誌九〇号の東京外国語大学岩崎稔先生による一文の中に収められていた。推察するに九〇年代の後半、翻訳者と編集者であるお二人がとある酒場で席を共にされている時、稲氏が酩酊の気味でぼろっと、大学出版部を立ち上げるための最低限の条件を語ったことらしい。そのまま引かせていただくと、

「どんな本を出したいのかについてエディタースhipがはっきりしていること。最低でも四千万円は準備して五年は頑張ること、それにならざる経験のある編集者を中心据えて、あとは経理のひとと営業のひとを、両方、だめならどちらかひとりを雇うこと。これらが整わないと無理です」。それから二〇年たった今、どのレベルを目的に置くかにもよるが、「経験のある編集者」を一人雇うことさえ難しい現状にあって、「本が好き」であるという素朴な初心に戻ることも肝要であるかも知れない。

北海道大学出版会

- ▼陳天璽・大西広之・小森宏美・佐々木
てる編著『パスポート学』(A5判・二
九二頁・三二〇〇円)多種多様なパスポ
ートや身分証明書を紹介し、無国籍や難
民・移民の問題も交えて、国家・国籍・
国籍と人をつなぐ「パスポート」を体系
的に考えるための手がかりを提供する。
- ▼相原秀起著『ロシア極東 秘境を歩く
―北千島・サハリン・オホーツク』(四
六判・二二八頁・二八〇〇円)旧国境線
から東シベリアの北極圏まで、探検部出
身の探究心あふれる記者が秘境を取材し、
日口両国の知られざる歴史と現地の今を
いきいきと描き出す。
- ▼八楯利郎著『北大風景スケッチ』(A5
判・七二頁・二〇〇〇円)元北大美術部
顧問のスケッチ集を追加再編集した新版。
- ▼田山忠行編著『空間に遊ぶ―人文科学
の空間論』(四六判・二八〇頁・二四〇
〇円)人と空間の関わりについて、人文
科学の専門家が多様な側面から解説。
- ▼本間研一・本間さと編『Circadian
Clocks』(B5変・二二六頁・一〇八〇
〇円)生物リズム国際シンポジウム30周
年記念成果集。

弘前大学出版会

- ▼松木明知著『The Origin and
Evolution of Anesthesia in Japan』
(B5変型判・二六四頁・五五〇〇円)
日本における麻酔科学の歴史を、豊富な
史料とフィールドワークをもとに紐解く。
敗戦以前の麻酔科学の遅れの原因を追究
し、国内的要因と国際的要因の両面を明
らかにする。日本の麻酔科学史の全体像
を明らかにした前著 *A Short History of
Anesthesia in Japan* に続く、具体的な諸
問題についてさらに深い洞察を提示する
画期的著作である。巻末に日本麻酔科学
史の詳細な年表を付している。
- ▼清剛 治著『Educational System
Innovation for Regional Economic and
Social Development—Revitalization in
Lowell, Massachusetts』(B5変型判・
一五四頁・五六〇〇円)地域社会開発へ
の一翼を担う地域大学の人材育成機能に
光を当て、衰退した産業地域の再生に係
る方法論を提示する。産業盛衰の歴史的
経験、地域イノベーションシステムの比
較、セクター・オブ・リージョンとして
の大学の役割をめぐる緻密な論証は、日
本の地方創生への大いなる示唆となる。

東北大学出版会

- ▼三谷鳩子著『トマス・アクィナスにお
ける神の似像論』(A5判・二二六頁・
二八〇〇円)中世を通じて様々に論じら
れてきた、「神の似像」論。この問題に
ついて優れた洞察を示したトマス・アク
ィナスの思考を解明する。第1章・トマ
スの『命題集註解』における「似像」の
定義/第2章・トマスの『真理論』にお
ける神の似像/第3章・言葉と愛の発出
の根源/第4章・トマスの『神学大全』
における「似像」の定義/第5章・自己
認識の問題/第6章・トマスの恩寵論に
おける「ハビトゥス」概念
- ▼東北大学自然科学総合実験テキスト編
集委員会編『自然科学総合実験2017』
(A4判・二九六頁・一八〇〇円)東北
大学の全理科学系部一年生向けのテキス
ト。テーマは二一世紀の社会的興味で
ある「地球・環境」「エネルギー」「生命」
「物質」「科学と文化」から構成される。
各テーマについて物理学・化学・生物
学・地学の融合的視点から実験し、初修
者から比較的高度な教育を受けた学生に
まで、自然に親しみ、自然を論理的に理
解できるように設計した。

流通経済大学出版会

▼久塚謙一著『環境論ノート―地球のた
めにできること』（B5判・二〇〇頁・
二五〇〇円）本書は、環境・エネルギー・
食料等の問題と対応策に関心を持つ人々
を対象に、「生態系としての地球」上で
起きている諸問題の動向と対応策のヒン
トをまとめたものである。読者が読み解
きやすいように図表を多用し、深掘りし
やすいように数多くのWeb情報を明示
した点が本書の特徴である。



▼横井のり枝著『小売業の国際化要因―
市場拡大時代における日本小売業の将来
性』（A5判・一九八頁・二七〇〇円）
文化習慣の差異により、国際化が難しい
とされる食品を取り扱う小売業の海外市
場進出を、データ分析により示唆した。



聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・川並珠緒・関口
明子・羽生和夫著『幼児理解と一人ひと
りに応じた指導』（B5判・一一六頁・
一五〇〇円）幼児理解の意義から指導計
画、実際の指導法、指導要録等の書き方
に至るまで、幼児理解と指導についてひ
ととおり網羅できる一冊。



▼聖徳大学特別支援教育研究室編『改訂
版 一人ひとりのニーズに応える保育と
教育―みんなで進める特別支援』（A5
判・二二八頁・一五二八円）特別支援教
育について子どもの理解と指導・支援に
必要な基礎知識を初學者にも分かりやす
く解説。



麗澤大学出版会

▼梶田幸雄他著『中国対外経済戦略の
リアリティ』（A5判・二四八頁・二七
〇〇円）。アジアインフラ投資銀行の発
足を受けて、二〇一六年中国の「一帯一
路（新シルクロード）」構想及び「走出
去（中国企業の対外直接投資）」戦略が
本格的に始動した。中国の意図を整理し、
構想と戦略を実施する上での国内外にお
ける要件、課題、国内産業への効果につ
いて分析・検討し、今後の発展を予測す
る。



〈目次〉
第I部 対外直接投資戦略の意義と政策
体系／走出去／戦略の意義と効果／「一
帯一路」構想と「伙伴关系」の構築／他
第II部 対外投資戦略のリアリティ
対外投資戦略の中国経済への効果／対外
投資戦略の課題 第III部 対外投資戦略
の展望 開放型経済の新体制は描けるか
／対外投資戦略成功のための要件／他

慶應義塾大学出版会

▼N・グッドマン著、戸澤義夫・松永伸司訳『芸術の言語』（四六判・三〇四頁・予価四二〇〇円）絵画、音楽、ダンス、建築……芸術はすべて現実の部分进行分类する記号として、私たちが生きる世界の理解と、その世界の構築に貢献している。現代美学および英米哲学一般において、芸術の問題へのアプローチを根本的に転換した分析美学の最重要書。

▼松居竜五著『南方熊楠―複眼の学問構想』（A5判・六八八頁・四二〇〇円）アメリカ、キューバ、ロンドン、那智―。世界各地を自ら踏破し、古今東西の膨大な時空に広がる文献を駆使して、*Nature* や *Notes and Queries* に四〇〇篇近い英文論考を発表。西欧の知的潮流に正面から向き合い、独創的な知を紡いだ学者南方熊楠、誕生の軌跡。

▼タナハシ・コッツ著、池田年穂訳『世界と僕のあいだに』（四六判・一九二頁・二四〇〇円）。黒人の肉体は自らの所有物ではなく、「国民の自由と平等」を掲げ、白人によって築かれた祖国アメリカの歴史を支えてきた資源にすぎない。透徹した眼差しで描くアメリカの現在。

専修大学出版局

▼蔣純青著『中国の高等歴化と大卒者就職の諸相』（A5判・二四八頁・二八〇〇円）中国では高等教育機関の定員拡大策により高学歴化が進み、大卒者の就職難を生み出している。本書では大卒者就職の、出稼ぎ労働者が不足している産業構造での適合性を分析し、就職意欲や満足度、賃金についても考察する。また、日本の「新卒一括採用」制度との比較から、中国式制度の見直しを提言する。

▼白鳥克弥著『神林長平論―コミュニケーションと意識の表現』（A5判・二四〇頁・二四〇〇円）日本SF界を代表する一人である神林長平の作家論。従来取り上げられている「機械」「言葉」の視点ではなく、「コミュニケーション」と「意識」を主題にして、神林作品を読み解いていく。

▼井上幸孝・佐藤暢編『人間と自然環境の世界誌―知の融合への試み（新書判・二八〇頁・九〇〇円）文学・歴史学・動物生理学・地球科学など分野を超えた広い枠組みから、人類・文明と自然・環境のかかわりを考える。学際的な視点を育むことを試みた一冊。

大正大学出版会

▼大正大学地域構想研究所編『地域人』（A4判・平均一四四頁・八一五円・毎月十日発売）「現代社会の最優先課題は、地域創生にある」をテーマに、地域の実態理解と再生の方法論をさまざまな視点から紹介する地域情報満載の総合情報誌。地域特集では、現地取材をもとに、物事を経済的視点だけから見るとはならず、多様な文化、歴史、暮らしに至るまでを掘り起すことを目指している。一方で、地域創生とは何かを豪華連載人による、人口、産業、食文化、リノベーション、ふるさとと信仰など、社会から心の問題まで幅広い提言を毎号掲載する。第一八号特集「子育てしやすい地域をつくる―現代の「子育て支援」に必要なのは地域を創造する新たなセンス／パートナーシップの取組み／パート2自治体の取組み／パート3企業の取組み他



玉川大学出版部

- ▼松田岳士・森雅生・相生芳晴・姉川恭子編著『大学IRスタンダード指標集―教育質保証から財務まで』（B5判・二九六頁・二八〇〇円）高等教育機関ではどの指標をどう使うかを整理・解説する。
- ▼坂野慎二・湯藤定宗・福本みちよ編著『学校教育制度概論 第二版』（A5判・二七六頁・二八〇〇円）学校教育制度の基本的な視座、変動する社会における歴史的發展過程や課題を整理した入門書。
- ▼渡邊満・山口圭介・山口意友編著『新教科「道徳」の理論と実践』（A5判・二八八頁・二八〇〇円）小・中学校「特別の教科 道徳」の具体的なあり方と実践方法を、新学習指導要領に即して解説。
- ▼瀬山士郎編／山田タクヒロ絵『玉川百科 こども博物誌』数と図形のせかい』（A4判・一六〇頁・四八〇〇円）おぼえる算数から理解する算数へ。数や計算、図形の謎解きを楽しみ、世界を広げる。
- ▼アーサー・ビナード作／スズキコージ画『ドームがたり』（変型判・三四頁・一六〇〇円）ドームの目で世界を見つめると何が見えるか。原爆の本質とは？ドームが自分のことばで語る物語絵本。

中央大学出版部

- ▼武智秀之著『政策学講義―決定の合理性 第二版』（A5判・三四八頁・二九〇〇円）公共部門の政治学を想定した公共政策教科書。環境政策や家族政策などの政策分野を網羅。
- ▼益永淳編著『経済学の分岐と総合』（A5判・三七四頁・四四〇〇円）各時代を代表する経済学者に焦点を当てながら、一八世紀後半のアダム・スミスから二〇世紀半ばのケインズ以後に至る欧米の経済学の歴史を再解釈し、現実経済と経済学の結びつきを示す。
- ▼山内惟介著『比較法研究第三巻―法文化の諸形相』（A5判・三六〇頁・四三〇〇円）わが国の社会行動様式（法文化）中、他者との対話（対人関係、社交、教育方法を含む）および自己との対話に関する法文化を検討する。
- ▼森光著『ローマの法学と居住の保護』（A5判・五六六頁・六七〇〇円）建物の高層化に伴い住環境が変化しつつあった古代ローマの元首政期にあって、居住の保護という観点からこの時代の法学の全体像を捉え、ローマ法の実像の解明を目指す。

東京大学出版会

- ▼森千香子著『排除と抵抗の郊外―フランス（移民）集住地域の形成と変容』（A5判・三〇四頁・四六〇〇円）移民・マイノリティの若者が集住する「郊外」を起点にフランス主流社会との亀裂をたどり、暴力の背後にある排除と抵抗の実態にせまる。第一六回大佛次郎論壇賞受賞。
- ▼工藤庸子著『評伝 スタール夫人と近代ヨーロッパ―フランス革命とナポレオン独裁を生きぬいた自由主義の母』（A5判・三六八頁・六五〇〇円）独裁に抗いながら個人の自由を求めつづけたスタール夫人の知的営みとその生涯を跡づける。
- ▼東京大学先端科学技術研究センター・神崎亮平編『ブレイクスルーへの思考―東大先端研が実践する発想のマネジメント』（四六判・二五六頁・二二〇〇円）最先端の現場で活躍する研究者一人一人。インタビュから発想法・研究法を探る。
- ▼西野嘉章著『前衛誌―未来派・ダダ・構成主義』外国編』（A4判・七五八頁・三九〇〇円）二〇世紀初頭アヴァンギャルドの時代の主要誌から稀覯本まで、出版デザインを収集した美麗な図版篇と書誌的解説を付した論文篇の二冊組。

東京電機大学出版局

▼大西公平著『リアル』を掴む！ 力を感じ、感觸を伝えるハプティクスが人を幸せにする』（四六判・一九二頁・一六〇〇円）

私たちはものに触るだけで、硬い・柔らかいなどの感覚が分かる。それは、力を感じる「力覚」、触った感じを表す「触覚」、すなわち「力触覚」を生まれながらももっているからである。しかし、この感覚をもたない機械は、硬い・柔らかいなどの判断ができない。そのため、ものを掴むなどの動作の際、場合によっては破壊や変形をもたらしてしまう。ハプティクスとは、力触感を機械へ実装し、力、振動、動きなどを通じて利用者へ与えることができる新技術である。本書は、世界で初めて「鮮明な力触覚の伝送技術」の開発に成功した慶應義塾大学の大西公平教授がインタビュ形式をとりながら、この技術の理論的背景をやさしく解説。また、あらゆる分野に広がる応用についても詳解しており、機械の自動化や介護、様々な場面で活躍するロボットが求められる分野において、必要不可欠な技術であることを説く。

法政大学出版局

▼長沼美香子『訳された近代―文部省『百科全書』の翻訳学』（A5判・四三八頁・五八〇〇円）明治初期、最先端の西洋文明を紹介した文部省主導の出版事業は、

近代日本の言語・文化・学問に何をもたらしたのか。事業の概観と、各分野の主要翻訳語に着目し翻訳学の視点から初めて総合的にアプローチした画期作。

▼J・ヘーリッッシュ／川島建太郎・津崎正行・林志津江訳『メディアの歴史―ビュグバンからインターネットまで』（四六判・五一六頁・四八〇〇円）宇宙誕生から現在まで、存在はつねにメディアとともにあった。人類の感性と意味の領野を拡張してきたメディアの歴史を唯一無二の視点で総覧する圧倒的通史！

▼N・エリアス／大平章訳『シンボルの理論』（四六判・三五〇頁・四二〇〇円）言語はいかにして世代を超え、時代を超え伝承されてきたのか。そして、言語はなぜ人間の集団形成および知識・文化形成における社会的原動力となりえたのか。言語・知識・文化に関する総合的理論を構築するとともに、知識社会学の刷新を試みたエリアス最晩年の重要作。

武蔵野大学出版会

▼ケネス・タナカ編著『智慧の潮―親鸞の智慧・主体性・社会性』（A5判・三四四頁・三〇〇〇円）「信じる宗教」といわれる親鸞の思想だが、その本質は極めて多面的で重層的なものである。初期仏教や大乘仏教で重要視されてきた、「智慧」「主体性」「社会性」に焦点を当てて一三名の研究者が多様な見解を試みる。

▼樋口一葉著／千明初美漫画『漫画版文語』たけくらべ』（A5判・二四〇頁・二五〇〇円）『たけくらべ』の原文（文語）を漫画のフキダシに収めて解説した、まったく新しいタイプの文学BOOK！



▼ケネス田中編著『仏教と気づき』（四六判・一七六頁・一七〇〇円）仏教は「信じる宗教」ではない。心身を通して真実に気づく「気づきの宗教」なのだ。「何に、どのように気づくべきなのか？」武蔵野大学の仏教学・印度哲学の専門家が、独自の視点からやさしく解説する。

武蔵野美術大学出版局

▼大坪圭輔『**工芸の教育**』（A5判・三三六頁・二四〇〇円）

工芸の定義から工芸教育の歴史、設備、題材開発、鑑賞まで、工芸教育の基礎をおさえながら、教育の枠を超えた広い視野で工芸をとらえ考察。一層の合理化・デジタル化がすすむ現代社会における、「工芸」＝「手仕事」の存在意義と「工芸の教育」の可能性を探究する。汎用的能力としての「創造力」を育むために、自らの手を使った「ものづくり」からの学びは、いかに機能するのか。

▼高橋陽一・伊東教『**道徳科教育講義**』（A5判・三二二頁・一九〇〇円）

新しい道徳科、特別の教科である道徳が翌年から小学校で、翌々年から中学校で始まる。従来の「道徳の時間」の弊害を乗り越え、チーム学校によるアクティブラーニングとして、多様な価値観をどう育むか、子どもの討議をいかに促すか、政治や宗教の対立をどのように扱うか、否定された読み物教材の問題とは？道徳の理論や歴史から実践的な授業のプランまで、教師に必要なノウハウと教養を伝授。

明星大学出版部

▼齋藤政子編『**安心感と憧れが育つひと・もの・ことー環境との対話から未来の希望へ**』（B5判・三〇〇頁・二三〇〇円）子ども時代を豊かにする「ひと」と「もの」と「こと」のあり方を考える。スマホ・ネイティブの子どもがおとなになっていく現代だからこそ考えたい様々な問題に迫り、保育に役立つ具体的な情報を紹介する。保育者・教師・保育を志す学生に読んでほしいテキスト。

▼青木秀雄編著『**現代教育制度と経営**』（A5判・二九四頁・一五〇〇円）教育制度と教育経営の現代的課題について学校教育を中心に考察。

▼明星大学明星教育センター編著『**自立と体験1**』ポルトフォリオ（A4判・九六頁・一六〇〇円）全学生が体験を通して互いに学ぶ初年次教育の共通テキスト。

▼明星大学教職センター編『**第2版 教員を目指す君たちに受けさせたい論文講座ー教育の見方・考え方が変わる**』（A5判・一七八頁・一六〇〇円）

▼同『**教員を目指す君たちに受けさせた面接試験対策講座ー教員になる覚悟を持つ**』（A5判・二五〇頁・一九五〇円）

早稲田大学出版部

▼尾島俊雄著『**東京安全研究所・都市の安全と環境シリーズ**』東京新創造（A5判・一七六頁・一五〇〇円）生活者にとって魅力ある持続可能な都市とは？水辺・緑地・風の道があり、安全と福祉を増進する新しい都市のインフラストラクチャーを提言する。



▼上野義雄著『**早稲田大学学術叢書**』現代日本語の文法構造 統語論編（A5判・四〇〇頁・五〇〇〇円）『現代日本語の文法構造 形態論編』の続刊。同書で得られた成果を基に、そこで展開された形態論と対になるべき統語論を描く。

▼酒井雅子著『**早稲田大学エウプラクシス叢書**』クリティカル・シンキング教育（A5判・三二六頁・四〇〇〇円）

クリティカル・シンキング教育の提唱者であるリチャード・ポールおよびマシュー・リップマンの理論を解明しつつ、同教育の実践的方法を提示する。

関東学院大学出版会

- ▼藤田潤一郎・田中綾一編著『今、私たちに差し迫る問題を考えるvol.1・2』（B6判・二九二頁・二〇〇〇円）本書は、民法、憲法、刑法、会社法、国際経済法、国際経済、そして政治学の各領域における重要な課題について、専門性と概説的要素を併せ持った知見や考察を、広く社会に提供するものであり、人々の問題意識と知的好奇心を満たす書である。
- 第1章 社会変動と家族法規定
第2章 「移民」の権利
第3章 ニホン刑事司法の古層
第4章 二〇一四年改正会社法上の監査等委員会設置会社の検討
第5章 WTO紛争解決制度の意義と課題
第6章 BrexitとBrexit
第7章 教皇フランシスコとローマカトリック教会
- ▼本田直志・田中綾一編著『今、私たちに差し迫る問題を考える』（B6判・二二四頁・一八〇〇円）少子高齢化、グローバル化や市場開放による産業構造の変革、地域紛争や安全保障。これらの問題を的確に分かりやすく解き明かす。

東海大学出版部

- ▼吉田武著『はじめまして物理』（A5判・六〇八頁・二七〇〇円）総ルビによる小学生のための物理入門、大人のための再入門の書。初等幾何学からはじめ、物理の基本である力を縦横に論じた。
- ▼吉田弥生他著『はじめてのワールドワーク②海の哺乳類編』（B6判・三二四頁・二〇〇〇円）シリーズ第二弾は、イルカにアザラシ、オットセイなど海域に棲息する哺乳類の研究者が登場する。
- ▼水田拓著『「幻の鳥」オオトラツグミはキョローンと鳴く』（B6判・二二六頁・二〇〇〇円）世界中で奄美大島だけに棲むオオトラツグミ。謎に包まれたその生態を、亜熱帯照葉樹林に追う。
- ▼奥谷喬司編著『日本近海産貝類図鑑第二版』（B5判・一三八二頁・三八〇〇円）貝類からウミウシ類、イカ・タコ類まで日本近海産の軟体動物全綱を網羅。六千種を記載した世界最大の貝類図鑑。



- ▼岡本隆司著『中国の誕生—東アジアの近代外交と国家形成』（A5判・五六二頁・六三〇〇円）「中国」とは何か、なぜ摩擦が絶えないのか。現代中国の原型が浮かび上がる過程を詳述し、万国公法などの翻訳概念の変容を手がかりに、誰も描きえなかつた「中国」誕生の全体像に迫った渾身作。
- ▼鎌田由美子著『絨毯が結ぶ世界—京都祇園祭インド絨毯への道』（A5判・六〇八頁・一〇〇〇円）京都祇園祭の山鉾に飾られている「幻の絨毯」は世界とつながっていた。絨毯のデザイン等から流通・受容までを解明し、多数の図版とともに、日本・インド・欧州を結ぶ絨毯の道を迎える美のグローバルヒストリー。
- ▼久木田水生・神崎宣次・佐々木拓著『ロボットからの倫理学入門』（A5判・二〇〇頁・二二〇〇円）自動運転車やケア・ロボットなどが引き起こしうる、もはやSFでは済まされない倫理的問題を通して、人間の道徳を考える。「本書には、ロボットやAIという新しい隣人たちとつきあう上で参考となる倫理学の知恵が詰まっている」——伊勢田哲治。

三重大学出版会

▼荒木慎也著『石膏デッサンの100年』(A5判・二二二頁・二八〇〇円)石膏像、石膏デッサン教育、美術系大学、美術予備校など、従来ほとんど日の当たらなかつた対象を掬い上げ、美大受験生たちの血と汗と涙の結晶石膏デッサンの歴史をいま解き明かします。

▼松岡裕之他著『衛生動物学の進歩(第2集)』(A4判・三六〇頁・六〇〇〇円)前著より四五年を経て学問の進歩の集大成を記す待望の第二集。衛生動物学は人の衛生に直接的な害を及ぼす有害動物を研究する学問です。

▼濱森太郎「松尾芭蕉作『笈の小文』―遺言執行人は何をしたか』(A5判・二〇九頁・二七五〇円)芭蕉紀行文『笈の小文』の成立を問ひ直す。遺言執行人各務支考は何を行ったのか。芭蕉の常識がゆらぎます。

▼竹田寛・竹田恭子著『理事長の部屋から』(B5判・二二二頁・一八〇〇円)桑名市総合医療センター理事長竹田寛の四季折々の花に関する随筆と写真、竹田恭子の心温かなイラストとともに文学、絵画、音楽、映画へと話が展開します。

京都大学学術出版会

▼川分圭子著『ボディントン家とイギリス近代―ロンドン貿易商1580-1941』(A5判・七五〇頁・六〇〇〇円)清教徒革命前夜から二十世紀初頭まで、レヴァント貿易・西インド貿易に従事し、ロンドン市民、貿易商、新教非国教徒として、シテイを拠点に、自由に勤勉に生き抜いた中産階級の一族。その経験とネットワークを軸に、英国が民主主義と資本主義を築いた三〇〇年を描く。

▼オギユスタン・ベルク著、鳥海基樹訳『理想の住まい―隠遁から殺風景へ』(A5判・四九四頁・六〇〇〇円)「KYOTO地球環境の殿堂」第八回殿堂入り者、オギユスタン・ベルク氏による都市論の集大成。都会に生活基盤をもちながら、自然豊かな公害に住まいを求める人々。その思想の根源に迫る。

▼植田和弘・山家公雄編『再生可能エネルギー政策の国際比較―日本の変革のために』(A5判・三七二頁・三五〇〇円)再生可能エネルギー導入を妨げる誤解や不完全な情報に具体的に反証し、積極的な推進政策のための理論的基盤とデータを提供する。

大阪経済法科大学出版部

今回は既刊書の紹介です。
▼フランコ・フェラレ著／高橋 進監訳『現代イタリアの極右勢力―第二次世界大戦後のイタリアにおける急進右翼』(A5判・三一八頁・五二〇〇円)

民主主義国家であるはずのイタリアで、八〇年代まで極右勢力と連携した軍部や国家機関の中核によるクーデターの計画があったこと、右翼にきわめて好意的で犯罪を隠蔽する裁判所や国家権力の存在等、イタリアのもう一つ顔を詳細に分析。本書の特徴は、第一に「急進右翼」運動の歴史を詳述しているだけでなく、急進右翼の概念化、その政治戦略、思想内容を深く分析していることである。

第二に国家諸機関、とりわけ軍、諜報機関、官僚、政治家と急進右翼との関係を裁判記録などを基に詳細に分析していることである。

この二点において、本書は戦後イタリアにおける急進右翼運動研究の第一級の著作であるといつてよい。
(監訳者あとがきより)

大阪大学出版会

- ▼本間正明監修、松浦成昭・河越正明・日高政浩編『医療と経済』（A5判・四六六頁・五九〇〇円）複雑化する現代の医療が抱える問題を経済・経営の両面から包括的に分析し、解決の方向性を示唆する。
- ▼松田准一著『地震・火山や生物でわかる地球の科学』（四六判・二四四頁・一六〇〇円）世界中の石や火山・温泉を調べると見えない地球が見えてくる！
- ▼秦かおり・岡本多香子・井出里咲子著『出産・子育てのナラティブ分析 日本人女性の声にみる生き方と社会の形』（A5判・二八六頁・五四〇〇円）出産・子育てにかかわる意識、とりまく環境、参与の立場を生る声から読み解く。
- ▼吉田靖之著『海上阻止活動の法的諸相―公海上における特定物資輸送の国際法的規制』（A5判・四五二頁・五七〇〇円）国連等が海軍力を用いて公海上における物資の輸送阻止を行う活動について、既存国際法の限界と対テロに係る新たな動向を論考。

関西大学出版部

- ▼大津留（北川）智恵子著『アメリカが生む/受け入れる難民』（A5判・二九六頁・二一〇〇円）移民の国と言われるアメリカは数多くの難民を受け入れてもいる。その中にはアメリカが始めた戦争により生まれた難民も含まれる。難民化の原因を作ったアメリカにおいて、再定住した難民と地域社会との間に築かれる新たな関係を、インドシナ戦争時のモン族難民とイラク戦争時のイラク難民への聞き取り調査をもとに分析する。
- ▼李 春喜訳『ヘンリー・ジェイムズ短編選集』（四六判・三二六頁・二三〇〇円）ヘンリー・ジェイムズ没後百周年記念。本邦初訳で短編四編を紹介。南北戦争を題材にした最後の未訳作品「ある年の物語」、ヨーロッパ社交界の洗礼を浴びる青年の姿を描いた「ユー・ジーン・ピカリング」、ジェイムズ作品の中で異彩を放つ「ベンヴォーリオ」、結婚と恋愛の逆説をあつかった「進むべき道」の四編を所収。

関西学院大学出版会

- ▼山路勝彦著『地方都市の覚醒―大正昭和戦前史 博覧会篇』（A5判・四一〇頁・四八〇〇円）大正・昭和初期の地域的独自性を豊かに表現した地方都市博覧会の数々を、著者が収集した図版とともに、その歴史的意義を論ずる。
- ▼水野尚著『フランス 魅せる美―美は人を幸福にする』（A5判・一四六頁・一八〇〇円）絵画、建築、庭園など、数々の美しい物に溢れた美の国フランスの「魅せる美」に触れて美的センスを高める。カラー図版多数。
- ▼深山明著『企業危機とコントローリング』（A5判・二一六頁・三二〇〇円）固定費理論に基づいた企業危機及び危機マネジメントに関する考察の到達点とそれに基づいたコントローリング研究の出发点を論証。
- ▼馬場博史著『マスメディアの中の数学―小説・ドラマ・映画・漫画・アニメを解析する』（A5判・二二二頁・二〇〇〇円）高校の現役数学教師が、小説・ドラマ・漫画などに登場する数学にまつわる話題を紹介し解説する。

広島大学出版会

▼安村誠司、神谷研二共編『Public Health in a Nuclear Disaster: Message from Fukushima』(B5判・四六〇頁・五三〇〇円)本書は「原子力災害の公衆衛生」(南山堂)に広島大学の取り組みを加筆し、全編英訳したものの取り組みを世界に発信し、正しい理解を求める。

▼山崎勝義著『物理化学 Monograph シリーズ 下 第2版』(A4変型判・五一頁・一八〇〇円) Monograph 特定に限られた分野をテーマとする解説あるいは研究論文。物理化学において著者が抱いた疑問を攻略するシリーズ、待望の第二版刊行。初版に対して新たに第二章「相律における成分の数」が追加された。相律の学習において初学者を悩ませることが多い「構成成分の数」と「成分の数」の相違を生み出す『制約』の根拠および相律と平衡定数の関係を理解するための解説が記されている。

九州大学出版会

▼伊藤重希子著『移民とドイツ社会をつなぐ教育支援』(A5判・二七四頁・四二〇〇円)▼志村聖子著『舞台芸術マネジメント論』(A5判・一六八頁・三二〇〇円)▼大塚知昇著『On Weak Phases』(菊判・二二二頁・六〇〇〇円)▼下地理則著『A Grammar of Irbuj』(菊判・四六二頁・一〇〇〇〇円)▼後藤晴子著『老いる経験の民族誌』(A5判・三一〇頁・三八〇〇円)▼笠原広一著『子どものワークシヨップと体験理解』(A5判・二五〇頁・二八〇〇円)▼宮松浩憲訳『中世、ロワール川のほとりで聖者たちと。』(四六判・三七〇頁・三八〇〇円)▼馬場多聞著『宮廷食材・ネットワーク・王権』(A5判・三三六頁・五〇〇〇円)▼吉村徳重・上田竹志編『日中民事訴訟法比較研究』(A5判・八〇〇頁・九〇〇〇円)▼田口浩継著『森林親和運動としての木育』(A5判・二八八頁・五二〇〇円)▼水田丞著『幕末明治初期の洋式産業施設とグラバー商会』(B5判・二三八頁・五四〇〇円)

編集後記

今号では、「役に立つ学問？」という特集テーマのもと、「役に立つ／立たない」といった市場原理主義的な尺度で学問の価値を測るような昨今の国の政策や風潮について再考しました。一昨年の文科省通知(いわゆる国立大学文系学部廃止)騒動や、昨年ノーベル医学生理学賞を受賞された大隅良典先生が再三言及された理系の基礎研究の軽視の問題、昨今アカデミアを騒がせている、軍事と民生のデュアル・ユースの問題など、その傾向は現政権下でますます顕著です。

本誌九八号「先生、それって何の役に立つんですか？」の中で、佐々木敦さんは、学生からそう問われたら、「私は私が面白いと思うこと、驚きを感じることを、学生からそう問われたら、「私は私が面白く思うこと、驚きを感じることを、それがえのなさを感じさせてくれることを、それらをまだ知らない者たちに向かって、どうにかして語って、こうと思う」と仰っています。学問の価値は有用性の尺度のみで測られるものではありません。生の根本的な価値は何か、人間や社会をどう捉えるか、その探究の真摯さも一つの尺度と言えるのではないのでしょうか(K)

大同印刷(株)	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550
ダイニツク(株)	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル TEL 03-5402-1811
(株) 太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821
(株) 太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111
寶紙業(株)	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-7-14 TEL 03-3261-5335
(株) 竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617
(株) 東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34 TEL 03-3291-1771
(株) とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200
東光整版印刷(株)	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15 TEL 03-3632-0801
(株) トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288
図書印刷(株)	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700
(株) 日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431
(株) 日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-5255-2198
萩原印刷(株)	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12 TEL 03-3811-4272
(株) 博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711
藤原印刷(株)	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191
(株) 平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301
(株) 堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5 TEL 048-422-0029
(株) 毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340
誠製本(株)	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952
(株) 遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325
(株) 読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111
(株) ライトコミュニケーション	〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F TEL 03-3251-7571
渡辺印刷(株)	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1 TEL 03-3718-2161

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

(株) 朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749
垂細垂印刷(株)	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858
(株) アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360
尼崎印刷(株)	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122
(株) A L E	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627
王子製紙(株)	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072
岡本出版発送(株)	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2 TEL 048-471-6291
カクタス・コミュニケーションズ(株)	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-4-1 TUG-Iビル4F TEL 03-6261-2290
(株)加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281
城島印刷(株)	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102
(株)紀伊國屋書店	〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10 TEL 03-6910-0510
(株)クイックス	〒456-0004 愛知県名古屋市熱田区桜田町19-20 TEL 052-871-9190
(株)糸川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811
(株)クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001
港北出版印刷(株)	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201
三松堂(株)	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360
三美印刷(株)	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131
三立工芸(株)	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171
三和印刷(株)	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300
信濃印刷(株)	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601
(株)渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185
(株)真興社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181
新日本印刷(株)	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611
(株)精興社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021
創栄図書印刷(株)	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2014年6月刊】

2013年6月から4回にわたり開催された大学出版部協会創立50周年記念連続シンポジウム「新しい社会を拓く大学の力」の成果より、2点をブックレット化しました。 日本生命財団学術書出版助成図書



座小田豊 ごこたゆたか（東北大学大学院文学研究科教授）

田中克 たなかまさる（京都大学名誉教授）

川崎一朗 かわさきいちろう（京都大学名誉教授）

防災と復興の知 3・11以後を生きる

A5判・80頁／定価（本体1,000円＋税）ISBN978-4-13-003150-9

列島沿岸を巨大堤防で覆う？——これまで通りの高度技術をふりかざすだけで、はたして本当に強靱な社会をつくることができるのか。哲学・生態学・地震学による対話を通して、自然と社会を千年の単位で見直し、再生のための知のあり方を探る。

〈主要目次〉

第一章「ふるさと」の根源的な力と想像力の可能性（座小田豊）／第二章 森里海の連環から震災と防災を考える（田中克）／第三章 災害社会——本当に強い社会とは（川崎一朗）／終章「ふるさと」から「ふるさと」へ（座小田豊）



中村哲之 なかむらのりゆき（東洋学園大学人間科学部専任講師）

渡辺茂 わたなべしげる（慶應義塾大学名誉教授）

開一夫 ひらきかずお（東京大学大学院総合文化研究科教授）

藤田和生 ふじたかずお（京都大学大学院文学研究科教授）

心の多様性 脳は世界をいかに捉えているか

A5判・80頁／定価（本体1,000円＋税）ISBN978-4-13-003151-6

トリ、ヒト、それぞれが視る世界は同じものではない。赤ちゃんはいつごろから自分を自分と認識するのか。心の働きの多様性を比較認知科学・発達認知科学の視点からわかりやすく解き明かす。

〈主要目次〉

第一章 トリの「視る」世界——動物の錯視と心（中村哲之）／第二章 ヒト型脳とハト型脳（渡辺茂）／第三章 脳は世界をいかに捉えているか（開一夫）／第四章 討論——心の多様性と現代（藤田和生×中村哲之・渡辺茂・開一夫）／あとがき（藤田和生）

ナチュラヒストリーの時間

大学出版部協会編 A5判/160頁/定価(本体1,600円+税)

自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラヒストリーを愉しむ

I. Prologue of Natural History

- 第1話 自然を記録すること……斎藤靖二
第2話 自然史と本……青木淳一
第3話 日本のナチュラヒストリー……岩槻邦男
コラム① 動物写真の世界

II. History of Nature

- 第4話 ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司
第5話 マリー・ストープスの2つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子
第6話 京都の語り部：深泥池……竹門康弘
第7話 遺跡の土に秘められた情報……松井 章
コラム② ききみみずきん

- 第8話 遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀
第9話 ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人
第10話 日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

III. Diversity of Nature

- 第11話 サクラソウとマルハナバチ……鷺谷いつみ
第12話 日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和
第13話 琉球列島の自然史……太田英利
第14話 マンボウと標本……松浦啓一
第15話 分類学事始め：タクソン、タイプ、名前……馬渡駿輔
コラム③ サルにノミはいない？ 幻の定説

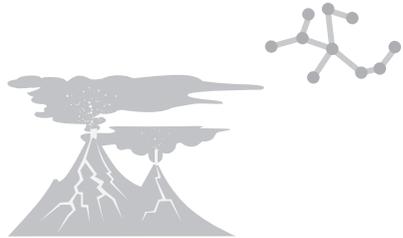
IV. Story of Nature

- 第16話 クマ大量出没の謎……大井 徹
第17話 ふしぎの国のアリ巢……丸山宗利
第18話 現代によみがえったインカ時代の狩猟……山本紀夫
第19話 子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲
第20話 熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗
第21話 殿様の自然史……松岡明子
第22話 幻のロバと男たち……木村李花子
第23話 食の博物誌：多民族国家のハイ・ティー……周 達生
コラム④ アリジゴクの自然史

V. Epilogue of Natural History

- 第24話 遺伝子を通じた動物との対話……村山美穂
第25話 ゲノム時代のナチュラヒストリー……西田 睦
コラム⑤ 小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一
自然史文献リスト



7net shopping セブンネットショッピング

おすすめポイント①

📖 専門書など約150万点の品揃え

おすすめポイント②

全国の  **セブン-イレブン** で、
24時間受取れて、送料0円

ネットで注文



店舗で受取り



ナナコ

nanaco ポイントも貯まってお得!

※一部サービスを実施していない店舗や24時間営業ではない店がございます

セブンネットショッピングはセブン-イレブンの通販サイトです。

<http://7net.omni7.jp>

セブンネット

検索



山形大学出版会

スタートアップセミナー 学修マニュアル

なせば成る!

三訂版

なせば成る! 編集委員会 編 800円+税

本書は大学や社会に必要な読む・書く・調べる・討論する・まとめる・発表する、といった技法をコンパクトに解説しています。2010年の初版発行以来大きな反響を呼び、本学のみならず他大学・高校・官庁・企業などで広く活用されています。このたび教育界の最新の動向をふまえ内容を見直し、新聞活用術やポスターセッションの技法なども追加した三訂版を発行しました。

〈発行〉山形大学出版会

http://www.yamagata-u.ac.jp/books/
〒990-8560 山形県山形市小白川町1-4-12
TEL:023-628-4840 FAX:023-628-4491

〈発売・注文〉山形大学出版会 販売部
TEL:023-677-1182 FAX:023-677-1199

名古屋外国語大学出版会の本!

魯迅 後期試探

中井政喜 著

わが国の代表的魯迅研究者による、決定版論考集大成。「本書はテキストクリティックの方法と思想の背景に存する魯迅自身の翻訳の成果を丹念に思想的に考察した本格的な学術書であり、今後の若手の魯迅研究者には必備の一書となる。」(図書新聞3293号より)

A5版ハードカバー1440頁 6500円+税

当会は書籍の刊行スタートから二回目の春を迎えます。「人生に役立つ言語・教養・学問・知識」のために……、キーワードは、街づくりの心理学、2017年のパンセ、味覚と言語と身体、フオークナーの森、翻訳不可能! Yesterday, Today and Tomorrow、19・5歳の世界文学、生きるための世界教養72講座、パプロ・ネルーダ詩集、新しい企画にどうぞご期待ください!

名古屋外国語大学出版会

Nagoya University of Foreign Studies Press
〒470-0197 愛知県日進市若崎町竹山57番地
TEL 0561-74-1111 FAX 0561-75-1723
http://www.nufs.ac.jp/
(丸善雄松堂株式会社・発売)

東京学芸大学出版会

Essential Mathematics for the Next Generation

—What and How Students Should Learn

IMPULS 編

日米英の数学教育研究者による次世代対応型教育モデル開発のための提言論集
※本書は全文英語で著されています

B5判 176頁 3500円+税

街の木ウォッチング

—オモシロ樹木に会いにゆこう

岩谷美苗 著

私たちの身近にある木々から、樹木医の著者がとびつきユニークな樹木を選び、独自のネーミングでその形や現象をわかりやすく解説する「目からウロコ」の自然交際術

A5変型判 160頁 1500円+税

4月下旬刊行予定

予近
定刊

教師失格 夏目漱石教育論集

大井田義彰 編 四六判 216頁 予価1500円+税

GIP

[TEL] 042-329-7797 [FAX] 042-329-7798
[HP] http://www.u-gakugei.ac.jp/upress

真のダイバーシティをめざして

特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育
ダイアン・J・グッドマン〔著〕出口真紀子〔監訳〕 田辺希久子〔訳〕
当たり前と思つて受けている恩恵に気づき、差別を自分の問題として向き合ってもらうために「私は差別なんかしていない」と思っているすべての人へ。

定価2400円+税

バイオバンクの展開

人間の尊厳と
医学研究

奥田純一郎/深尾立一共編
医学研究者、医師、法律家らが法的・倫理的・社会的な観点から、ゲノム・最過医療に不可欠なバイオバンクの意義とあり方を徹底討議。
定価2400円+税

〈発行〉Sophia University Press 上智大学出版
http://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/
publication/SUP

〈発売・注文〉〒136-8575東京都江東区新木場1-18-11
ぎょうせい TEL:0120-953-431 FAX:0120-953-495



表紙写真：学術書の山(全天球カメラで撮影)
(撮影：阿部卓也)

大学出版 110号(2017年春)
2017年4月1日発行
頒価 100円(〒共)

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail: mail@ajup-net.com
URL: <http://www.ajup-net.com/>

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覽

■ 北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市府畑120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

■ 聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

■ 麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

■ 慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-3918-7311 FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園G-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局

〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

■ 法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

■ 早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

■ 関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜年金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部

〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7820 FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

■ 三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学総合研究棟Ⅱ3階
TEL 059-232-1356 FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-9592

■ 広島大学出版会

〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
TEL 082-424-6226 FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ
305
TEL 092-833-9150 FAX 092-833-9160